

不相應なる大土工を起しぬ。工成り國王は此所に移り住す。内外文武の政廳を正門外の兩側に設け、王家の尊嚴は前古未曾有と聞へしに、去ぬる廿九年十月の變、王妃閔氏は王宮内の玉壺樓中に於て亂民の爲に弑せられしより、國王は痛く其の宮中に居るを嫌ひ、一たびは露西亞國公使に擁せられて其の使館に移りしが、後には現時慶運宮と名くる所元とは總稅務司アラオンの官舎たりし所に移り住はせらるゝことゝ爲りぬ。其後國王の稱を改め、名は大韓國皇帝と稱するも、其の宮城は外國使臣の官舎にも劣ると見ゆる小室中に留まり、彼の昌德宮の舊王城は言ふも更なり、大院君が國力を傾けたる壯麗の慶福宮も、楮は青山重疊として遠る間に、空しく玉樓粉牆の傾側して存するを見る。王建ならずと雖も、詩人は必ず憑吊の作無るべからず。

十月二十二日、余は田口君と共に周ねく昌德慶福の二宮を観る。我が林駐韓公使は、豫め韓國宮内大臣に牒を通じ、かば、宮内府は吏員を東道

とし、余等を導かしむ。此日行を偕にする者、棟居、遞信、書記、官喜、久馬、信夫、領事官補(淳平)等、一行總て十餘人、先づ慶福宮に赴く。宮の正門は光化と名け、門外の兩側には、内務、外務、軍務、法務、財務、農商務等の各衙門相對し、宛かも巨刹の側に附屬する末寺の如し。或者は之を評して、役所長屋と稱したるは、稍や當れり。光化門には日本の憲兵に似たる服裝の韓兵十數人、守衛し、出入者を誰呵す。余等は宮内大臣より交附せられたる通券を示し、かば、事無く入らしむ。門内の建築は門外の各省の矮少なる大に觀を異にし、宮殿の構造は摸範を清國の皇城に取り、殿前に階あり、階下の左右には石造の獅子を置き、庭中に石柱を樹て、一品以下各官等に應じて群臣拜謁の席次を定む。其門を入て正面なるを勤政殿と稱す。國王親臨して群臣の朝賀を受くる所なり。更に左方に轉すれば、思政殿あり。國王政を聽きし所。又左に轉して崇陽門といふを入れ、修政殿あり。一に議政府と稱し、此所の構造は半ば洋風に模し、椅子テーブルを備



ふ。王妃遭害の變に關係したる嫌疑を以て死罪に處せられたる金宏集が内閣總理大臣たりしときの内閣にして當時斯く改造したるなりとぞ。此所より輿を右に曲れば慶會樓と名くる宴會場あり。四拾八本の大なる石柱の上に築き縦二十間横十五間三方に廻廊を繞らして下は蓮池に臨み頭を舉れば近く白岳を庭外に望む欄に凭て涼を納むべく簾を捲て雪を賞すべく春花秋月時に佳ならざる無し。景勝に富めるは京城第一といふ。正に是れ王蒙が南風吹斷採蓮歌夜雨新添太液波水殿雲廊三十六不知何所月明多の觀あり。然ども一たび其樓を出て國王の平居御坐の宮なりしと云ふ康寧殿に到れば何事ぞ借側には多くの馬糧を乾かし、麻廂の上に唐辛子を曝し、守門の老爺は童子と共に之を監督せり。知らず此宮を營造したる大院君の靈は若し此狀を見ば果して如何にか感ずらん。康寧殿側の庭に井あり、聞く是れ往日閔王妃遭害の夜、死屍を此中に沈めんとして果さざりし所と。側に交泰殿あり。殿の左

右は庭苑廣く、庭中池あり、池中亭あり、頗る遊觀に適す。庭盡きて洋風の一建築を望む。其狀日本内地にて見る田舎の郡役所の如く、其の新を追へる規模は粗造なるも、周圍は舊制の宮殿にして、他の何れの宮殿にも見るが如く、床下に温籠を設けて各室を温め、其の中の一室は障子を閉ざし、官宦數人臥しながら長き烟管を啣へて隣室に在り、閉せる室を守るなり。室前の廊下には線香の燃売多し、故こそあらめと仰き見れば、遍して玉壺樓と書す。嗚呼、玉壺樓、是れ閔王妃の居室にして、固く鎖せるは遭害の場なるを知りぬ。此所を去て殿後に出れば、乾清宮あり、國王の寢所なり。中に入れば方一丈許の小室は、幾間と無く劃せられ、各室皆な女官の居る所の如し。正に是れ王建が、白日臥多嬌似病、隔簾教喚女醫人などの景は、斯かる邊りを想像して詠じ、ならん。總て宮院内の各室は、細かに劃せられたる上に、二面は壁を設け、一面は廊下を隔て、向側の室と對し、唯だ一方のみ外



に面して小なる扉障子を設け、晝尚ほ暗くして眠を催ほし易かるべきに、床下は皆な温窻を以て煖ため、床には濃き油を塗れる厚紙を敷く。此の小室の暗くして、煖かなる内に、晝夜起居する女官等は常に何事かを爲す、惟ふに是れ沈々別院自焚香、笑解羅襦、排御床の景を事實にし、偏へに君主の寵幸を競ふは、蓋し彼等の日課ならんか。

乾清宮の庭側に觀象臺あり、また庭中に石造の日圭あり、日圭とは子午線を以て方位と時とを測る器なり、此所より轉じて神武と名くる門を出れば、空濶なる廣庭の傍に一亭あり、隆武亭といふ、國王の武を觀る所、庭に隣りて農作試験場あり、傍の高臺に觀豐樓あり、國王臨みて耕耘の業を觀る所といふも、實は官妓を召して舞樂を觀る所に似たり。此等の景を賞しつゝ、余等は携ふる所の行厨を開きて、午餉を喫し、斯くて彰義と名くる北門より全く慶福宮を出づ。

慶福宮を出で、北方に五六丁を行けば、昌德宮の正門に達す、進喜門と

云ふ。之を入れれば左右に數多の門あり、其中にて仁政門といふを左に見、肅章門といふを入れれば、内にはまた延陽、協陽、建陽、崇徳の諸門あり。然とも其構造は、日本内地に於る田舎の寺門に類似し、且つ牆壁荒れて、扉垣多く傾き壞る。門内の諸宮殿は制を清國に則るも、規模の小なる上に、久しく修理を廢し、市井の小童は宮院の中に戯れ、錦福軒と名くる王宮中の御座所も随意に入るを禁せざるものゝ如く、余等の一行は彼方此方に分れ、終に途に迷ふて廢院荒宮の中に彷徨せるとき、先に行ける人々は遊戯せる童子等をして、迎へて導かしめしことあり。殿前艸枯れて、蟋蟀聲瘦せ、洞房壁落ちて、蜘蛛網密かなり、六宮の粉黛去て既に久しく、頭白き鵝鳥のみ長き尾を掉かして、頽垣の上を翺翔す。

宮殿は畫閣彫欄相連なるも、之を慶福宮に比ぶれば、其規模は半に及ばず、唯だ殿後の御苑は山を圍んで庭と爲し、松林あり、池亭あり、恰も紅葉の好時節、丹楓青松交錯して、錦繡の如し。山中に宙合樓と名くる邊り、四



面皆楓樹實に二月の花よりも紅なり。無情の植物は人既に去るを知らず、年々舊時の觀を呈す。闌らざりき余等天外の羈客、來つて此の壯觀を賞す、楓葉若し靈あらば、また満足を表するならん。山を攀ぢ林を過ぎ、明禮と名くる北門を出て、全たく昌德宮を辭せしは夕陽の既に山肩に傾むく頃なりき。(口繪寫眞参照)

### 韓國人の風俗

朝鮮の政治的命脈は、恰かも半死の老翁の如く、氣息奄々として何時滅亡するかを知る能はざるが如きも、是れ唯だ其の主權の上より言ふのみ。若し夫れ雞林各道の山河は、之を開拓するに其の道を以てせば、將來一大富源たるを疑はず。從來政治は腐敗して賄賂公行し、官職は賣て以て帝室の收入に供する一大財源と見做され、既に巨資を投じて官を買へる徒は、更に其の管下の人民を困しめて其財産を奪ひ、因て以て囊に失へる所を償はんと欲し、全國十三道中の各道に長たる、監司の如きは

其官に居ること三年なれば、子孫三世寢ながら食することを得と云へば、以て如何に多く苛斂を以て人民を虐するかを想像するに餘りあり。故に人民皆な働らいて富を爲さんとする者無し、若し富めば官吏の爲に奪はるゝに過ぎず、故に國民を擧げて懶惰放逸にして唯だ其日々々の衣食の資を得る外、また其の多きを食らず、土地あれども耕さず、鑛山あれども採掘せず、沿海の漁業も其利を收むるものなく、山林は盡とく亂伐してまた伐りて植ゑることを爲さず、國を擧げて唯だ其日暮らしに甘んじ、國運の日に衰ふるに任す。彼等朝鮮國民の生活状態を見れば、貴賤となく皆な白衣を着し、長き烟管を口にして烟艸を喫し、中人以上は官吏と爲て人民を虐げ、中人以下は勞働者と爲て日々衣食の料を得るのみ。其間また一人の國家百年の大計を劃する者無く、子孫の爲に勞働して其の資産を増殖せんとする者無し、其の國運の振はさるは固より宜なり。然ども朝鮮十三道の國土は能く利用せば一大富源なり、土地



は膏腹にして肥料を施さるも穀菜を栽培するに足り、山野は總て森林を養ふに適す。况や山の鑛業と海の漁業とは、天與無盡の賜ものなり。加之其の人民も彼の如き富めば奪はるゝの政治の下に在る爲に、終に懶惰爲す無きの悪慣習を馴致し、其の體格は強健にして、重きを負ふて長きに堪ゆるが如きは、日本勞働者の三舍を避くる所なり。故に彼の人民を導きて之を利用し、彼の山林原野に充溢する富源を開發せば、將來頗る好望に富む、之を爲す爲には、日本人の手を以て既に成功したる京仁鐵道と、將來成功せんとする京釜鐵道の如きを利用し、多く日本人を驅て朝鮮内地に入らしめ、朝鮮人をしてまた文明の新事物を目撃せしめ、漸く開導扶掖すること甚だ適當なるべきを感したり。

### 韓國の婦人

朝鮮の男子は、皆な懶惰にして生業に力めず、上流者は利巧にして遠識なく、下流者は魯鈍にして全たく事理を解せざるに反し、婦人は甚だ其

觀を異にす。概して婦人は皆な無教育にして目に文字を解する者少なきも、上流者は伶俐にして、悍智に富み、男子は多く其傀儡と爲て翻弄せらるると聞く。而して此等の婦人は、平生閉居して男子に接せざる爲に、詳かに觀察する暇無りしも、下等社會に在ては能く勞働し、彼の一般男子が服する所の白衣は皆な婦人の自ら洗濯し且つ裁縫するものゝ如く、溪間となく、河岸と無く、婦人の洗濯に従ふ者到る所群を爲し、然らざれば頭に水瓶を載せて水を遠きに汲み、或は機杼を動かして自ら織る等、其の勞働の様は甚だ勤勉にして、他の男子が長烟管を啣へて路傍に横臥するの比にあらず、また其の服装も甚だ淡泊にして、瀟洒たる所、之を日本支那の各婦人服装に比して遙かに勝るものあり。

元來朝鮮婦人の服装は、衣と裳とより成り、裳は最下に日本男子の用ふる袴に似たるを穿ち、其上に更に袴の裾を窄くしたる如きものを穿ち、更に其上に現時日本にて婦人の用ふるが如き袴を着し、此等の袴は、何



れも胸部まで纏ふて乳房の下に結び、更に上衣は極めて短かく胸下僅かに三四寸のみ、袖は筒形として胸部に合せ、下着より上着まで數枚を重ぬ、上流社會と下流社會とは唯だ其の色彩と品質とを異にするのみ。故に日本婦人服の如く歩行に裾の開けて脛を露はす愛なく、腰に幅度き帯を纏ふて平時屈伸を不自由にする不便なし。脚は晝夜靴を穿けども、支那婦人が纏足の爲に歩行に堪へざるが如き醜態も無く、西洋婦人がコルセットを以て強て腰間を壓搾するの不自然も無し、故に體格は自然に發達し、高踏闊歩するを妨げず。况や其の頭髮も額上にて正しく左右に分け、組みて後ろに之を垂るゝものは未婚婦にて、額の左右を方形に抜き上げ、後に束ねて髻を以て留むる者は既婚婦と云ふ。其の頭上の裝飾は、日本、支那、及西洋諸國の如く金釵珠環の多くを纏はず、極めて淡装にして而かも粗野ならず、實に朝鮮婦人の風俗丈々は、以て他國の模範と爲すに足るものゝ如し。其の服裝の材料は、上流にては上より下

までを用ひ、中流は下に金巾を着して上に絹を装ひ、下等社會にては、上下を通じて金巾を用ふるも、衣服に污垢を留めざると、炎天にも皮膚を露はすもの無きは、日本の勞働婦人社會をして一見せしめたく思はるゝ所多し。

### 韓國の遺利

朝鮮人が一般に貧窮なるを見て半島に遺利なしと速断するは誤まれり、朝鮮には遺利頗る多し、而して其國民の貧なる所以のものは、遊惰にして勤勉貯蓄の心なく、自から進んで其遺利を拾ひ、財源を開發するの能力なきが故なり、朝鮮人が遊惰なるは二つの原因あり、一は一般に勞働を賤しむの風あると、一は政治の腐敗に在り、朝鮮の人民には、生命財産の安固なし、財産に餘裕あれば忽ち貪官汚吏の爲めに征掠せられ、勤勉貯蓄は只だ官吏の腹を肥すのみ、所謂勞して功なく、骨折損の草臥儲けに過ぎざれば、彼等は只だ其日暮らしを以て足れりとするなり。故に



財源山海に充ち、遺利國內に堆積す。半島が我國の爲に重大の關係を有する。豈啻に軍事上のみならずや、經濟上に於ては實に半島は帝國の寶庫なり。今余が見聞したる所により、其財源の一斑を記述し、以て我が實業家の參考に供せんとす。

(一) 農業

余は元と朝鮮を以て多くは曉嶠不毛の地なりと信じてたり。實に彼地に遊びて歸りし人にして斯る説を爲す者多きに由りて之を信じしなり。然るに其の實地に臨みて詳かに檢すれば、前の説者は半島の山嶽が秃として樹木なきを見て、輕忽にも地質の粗惡なるを妄斷したるものゝ如く、余もまた其の説に誤られたりしを悟りぬ。何となれば朝鮮の山嶽に樹木なきは元來樹木の生ぜざるにあらざる實に濫伐の結果のみ。朝鮮人は其日暮らしの人民なるが故に、只だ今日あるを知りて明日の事を思はず、况んや十年二十年の前途をや。故に山林の樹木を伐採して更ら

に植うることを爲さず、管に殖林を爲さざるのみならず、其伐りたる跡の根株までも掘採て殘すことなし、焉ぞ其れ到る所の山嶽秃たらざるを得んや。若し村落を多く隔てし深山幽谷に到らんか、鬱々たる樹林は天を蔽ふて繁茂せるを見ん、况や大同鴨綠二江の上流の如きは皆な此の如き森林を以て蔽はると云ふ。聞く今より百四五十年前までは、到る所鬱蒼たる樹林あり、其樹林には虎豹の如き猛獸生息し、時々村落の人畜を襲ふ程なりしに、其後彼の温突なる煖房の發明せられてより、燃料の需用忽ち増加し、遂に今日の慘狀を呈するに至りしと、或は其れ然らんか。今日とても所々にある禁伐林を見るに、喬々たる巨木の天を摩するあるに徴しても、百年前の當時を推想するに足れり。故に山に樹木なきを見て地味の粗惡なるを判するは、誤れるの甚だしきものなり。朝鮮の地質は概して殆んど日本と異らず、隨て其肥沃なること亦た決して日本に譲らず。彼の幼稚なる耕作法は、肥料を用ゐざるも、尙ほ多量



の米麥大小豆を收穫し、盛んに外國に輸出して猶ほ餘りあり、之を見ても如何に其地味の肥沃なるかを推すべきなり、而して半島に於る農業の安全なるは、秋季に於て日本の如く暴風雨の襲來せざるを以て特色とす。尤も全羅、慶尙各道の一部は、暴風通過の餘波を受くることなきにあらざるも、其他の地方に於ては殆んど秋季暴風の何ものなるかを知らず、是に於て日本農業家が最も恐るゝ所の二百十日の厄日も、彼國農業者に取ては毫も之を意とせずと云ふ。而して尚ほ其の地は冬季の寒威頗る嚴烈なるが故に、諸種の害蟲蕃殖する能はず、稻作の害蟲に罹るが如きこと甚だ稀れなり、只だ恐るゝ所のものは旱害なり、元來朝鮮には一定の雨濕期ありて、六七月の交に及び、霖雨一ヶ月乃至二ヶ月も繼續することある代りに、春秋冬の三季は殆んど降雨なく、冬季には僅かに降雪ありと雖ども地上に積ること二三寸に過ぎず、加ふるに前述するが如く、各地ともに山林藪き故、水源に乏しく水田は一に天水に頼

らざるを得ず、若し不幸にして夏季降雨の乏しからんには水田は忽ち旱魃の災に罹らざるを得ず、憂ふべきは只だ此一事のみ、然れども朝鮮各地には小河流乏しき代りに、如何なる旱歲に逢ふと雖ども流水常に洋々たる大江あり、北にありては圖滿江、鴨綠江、大同江、中部に在ては漢江、南部に在ては洛東江、是等は江河中の最も大なるものにして、其他是等に亞ぐの大江少なからず、此等の流域は多くは平地にして水田多し、而かも朝鮮人は此等大江の流れを利用して水田に灌漑するの術を知らず、只だ空しく蒼天に向て降雨を祈る而已、故に若し山嶽樹木の濫伐を禁じ、山林を養成して水源を養はんか、假令多少の旱魃に逢ふことあるも甚だしき凶作に至らざるべきなり。

抑も朝鮮國土の廣袤は日本國の半ばに居り、其居民は一千萬に上らず、我國の割合より云ふときは、尚ほ一千萬の人民は饑に生息するの餘地あるべきなり、左れば内地に入りて村落の状況を見るに、土地徒らに廣



漠にして居民の配付甚だ稀疎なり。故に農耕の如き充分に手の届かざるも道理にして、加ふるに彼等の遊惰を以てす。若し其れ勤勉に且つ巧慧なる日本農民にして彼地に移住せんか、其就業の容易なるは内地北海道の比にあらざ、蓋し其利するところは彼れに倍するものあらん。而かも土地の賣買價格は日本に比するときは殆んど無代同様にして、一反歩十圓乃至二三十圓の間に在り。若し内地にて二反歩位の土地を所有する農夫、其所有地を賣却して彼地に至り、更らに購求せんか、優に五町歩乃至十町歩の地所を得て、忽ち大地主となるを得ん。また半島の地、桑樹に適し、且つ諸種の菓物能く實るが故に、農業上の副産物を得る亦尠なからざるべし。殊に養蠶の如きは最も望多き事業なり。余が一友人は試験の爲め、昨年、朝鮮婦人をして朝鮮式の養蠶を爲さしめたることあり。桑樹は素より天生の山桑にして、蠶兒は朝鮮の産卵なり。余が友人は只だ朝鮮の飼育法を研究せんが爲め、一切放任して干渉せざりし

が、其飼育法は幼稚と云はんよりは寧ろ亂暴なり、先づ蠶兒を掃立てるや直ちに胡椒を刻みて粉となし之を蠶兒に振掛けて給するなり、斯くて翌朝に至り始めて桑を與ふ、其給ひ方も極めて不規則にして無頓着なり、而かも蠶兒は極めて健全にして一の斃死を見ることなく、三眠を経て上簇せりといふ。左れど其繭は支那繭に似て形狀如何にも不格合を極め、絲の光澤良好ならず、必竟是れ蠶卵の粗悪なると天然生の山桑を與へしが爲めなるべし。想ふに半島の地は空氣常に乾燥して濕氣少きが故に、蠶兒の如き、諸種の病毒に罹ること少なく、飼育甚だ容易なるに似たり。若し其桑園を改良して日本種の桑樹を仕立て、精良の蠶種を以て充分の飼育法に由らんか、其結果必らずや、良好ならん。また菓實類にして能く實るは、林檎、梨、桃、李、杏、葡萄等にして、就中梨、桃の如きは最も此國の地味に適し、日本にて見得べからざる良好の種類を産せり。故に穀作の傍ら果樹園を仕立て、副産物の收穫を圖らんには、主産物に勝る



の利益を見るに至らんか。

(二) 商業

半島十三道其居民一千萬と稱す。而かも其國は純粹の農業國にして、工業なるものは絶無と云ふも可なり。故に衣服用の織物を始めとし、日用品の末に至るまで悉く外國品の輸入を仰がざるを得ず。年々我國其他より輸入する雜貨の額は莫大にして、我が國の商業上に取ては一大得意場と謂ふべし。人或は朝鮮人の外觀を見て動もすれば貧乏の民と爲し、購買力なき乞食同様の感を爲すものなきにあらざと雖ども、是れ必竟皮相の觀察たるを免れず。前に説くが如く此國の官吏は動もすれば事に托し脅迫して賄賂を貪るの風あるが故に、金満家は成るべく表面質素を裝ひ、家屋の如き極めて粗末なりと雖ども、内實は衣食とも随分贅澤を極め、中流以上婦人服の如きは日本人よりも却て其程度の高きを見る。且つ朝鮮人は好奇の民にして、兎角新奇なるものを欲しがる

の風あり。故に若し京釜鐵道開通し、猶ほ其他の地方にも鐵道敷設せられ、日本人との交通頻繁なるに至らば、彼等の購買力は益々發達すべく、其輸入物貨の數額も現今の二倍三倍に増進するや明かなり。只だ惜むらくは目下半島に在る我が商人等には種々の缺點ありて、爲めに動もすれば支那商人等に商權を掠めらるゝの狀あり。其缺點とは、第一資本に乏しき事、第二共同團結の力なくして兎角同士打を免れざる事、第三前途永遠の利益を計らずして只だ目前の小利に奔り、信用を重んぜざる事、第四貯蓄心薄くして動もすれば贅澤浪費に流るゝ事、是等は常に支那商人等に敗を取る原因にして、國民的勢力の至大なるにも拘はらず往々彼等の後へに墮若たる所以なり。彼の中流以上の男女が用ゆる所の絹衣の如きは、悉く支那産ならざるはなく、日本より輸入するものは、只だ金巾類あるのみ。當に是れのみならず、日本雜貨の如きすら往々支那人の手に依て輸入せられ販賣せらるゝの有様なり。故に若し日本



の大資本家にして其資本を下し、彼の支那人等の商權を回收し、全然我が得意場とするに至らば、實に至大の利益を占むるに至るべし、兎に角一千萬の農民を花客として其商權を握るとせば、實に非常の利源にあらずや。縱し貧乏の民なりとするも一千萬の客人豈に小なりと謂ふべけんや。

(三) 工業

半島の地たるや其昔は諸種の工業も大に發達したりしものゝ如く、我が國絹織物の如き、最初彼國より傳へられたることは歴史上にも明かにして、就中陶器類の如き、高麗焼と稱して今も人々其精巧を稱す、然るに朝鮮にては方今其高麗焼も僅かに古墳の中より發見せらるゝ位にして日用の陶器類は悉く日本より輸入を仰ぎ、即ち日本輸入品の重要地位を占め居れり。其他織物とても、麻布、紬、木綿等、僅かに古昔の係を存するも、是れとて下等社會の婦人等の夜業仕事に成るものにして、其産

額は以て全國の需用に供するに足らず、其他には未だ一も工業として見るに足るべきものなし。而かも朝鮮人は日本人に似て手工には至て器用の人民なり、何事にてても教ふれば出來ざる事なく、其柔順にして器用なる、體力の強健にして力量ある、實に好箇の器械的人間たり。故に日本人にして充分の資本を下し、諸種の製造業を半島の地に起し、彼等を驅て其工役者となさんか、半島は將來實に日本の工業地ともなるべし。殊に朝鮮人の生活は簡單にして費用寡きが故に、勞銀亦頗る低廉なり。且つ日本人にして陸續彼地に移住し、諸種の貨物を示して彼等の嗜好心を挑發するに至らば、彼等は其嗜好心に驅られて漸次遊惰の風を去り、隨て勞働者の供給は益々増加するに至るべし。差當り製造業として見込あるは、彼等に需用最も多き紡績、陶器、卷煙草、洋紙、マツチ等の類にして、紡績の外には何れも其原料を輸入するを要せず、彼國に於て採集し得べきが故に、輸入關稅丈は全く省ける譯なり。其他尙ほ彼の勞銀



の低廉なる朝鮮人を利用して起すべき工業類を求めたらんには随分多かるべし。

(四) 漁業

朝鮮は細長き半島にして、沿海線頗る長く、其近海には無数の魚族生息す。故に漁業には最も利益多き國なるも、朝鮮人は造船術幼稚にして最も漁業に拙なり。而して漁業權は十三道の沿岸悉く日本人の占むる所なるは世人の既に熟知する所、左れば斯業の如き將來十分に擴張すべき餘地あり。

(五) 鑛業

半島の財源中最も大且つ利なるは金銀其他の鑛山にして、十三道到る所の地下多量の鑛物を産出せざるはなく、就中最も大なるは平安道とす。惜しい哉、其中に於て最も有望なりと稱せらるゝ雲山金鑛は既に米國人の爲に占められ、殷山金鑛亦た英人の得る所となる。左れと其他に

於て尙ほ有望の鑛山多く、既に邦人淺野總一郎氏の要求出願に係るもの五ヶ所の多きに及べり。尙ほ充分の探檢を爲したらんには有利の場所多かるべし。平安道には又た多量の砂金を産出し、平壤市に於て邦人が朝鮮人の手より買占め居る量は一ヶ月平均七八貫乃至十貫目の多きに上るといふ。

(六) 林産及牧畜

半島の地到る所禿山にして、殆んど居民の燃料にすら缺乏せるにも拘はらず、鴨綠江の上流清國と境を接したる地方には無盡藏の森林あり。年々伐出して輸出する價格數十萬圓に上る。而かも其商權は殆んど支那人の手に在り。目下義州に居を占めて斯の商業に従事せる邦人四五名あり。左れど何れも小資本なるが故に到底支那人と對抗するに足らずと云ふ。是等は實に惜むべき遺利なりと謂ふべし。また半島の馬匹は其体格小にして多くは驟馬若しくは驢馬の類なれども、牛は体格頗る



巨大にして、日本の所謂大津の車牛に類せり。牛豚肉は朝鮮に於ける重要の食品にして、其屠殺額も随分尠なからず、牛皮は此國輸出品の一種たり。左れば牛の牧畜事業亦た農業者の一副産とするに足れり。豚は各戸大概飼育せざるはなく、其肉の價は却て牛よりも高し。

(七) 半島の成功者

以上は唯だ半島に於ける財源の大要を記るしたるに過ぎず。尙ほ細目に就て一々記載せんには、種々の材料乏しからずと雖ども、今は唯だ半島に於る營利事業の如何に容易なるかを示さんが爲めに、左に其一二の例を擧げんとす。

京城に山下某なる者あり。彼れは明治廿七八年の戦役に際し、一個の軍夫として渡韓せし位のものなれば、素より格別の資産を有せしものにあらず。然るに彼れは戦後京城に留まり、多小植木職の心得あるを幸ひに、僅かの土地家屋を居留地附近に求めて、植木屋を始めたるに、意外に

も其圖に當り、漸々資力を増殖して土地を購求し、朝鮮人を使役して農業を始め、傍ら又金貸業採して、今は數千圓の身代を作り、京城紳士の列に連るに至れり。

平壤に難波某なる者あり。彼れは渡韓後、仲仕採して他に雇はれ居たりし者なりき。昨年春、其國元なる至親大病に罹り、至急歸朝すべき旨の急電に接したるも、僅に八九圓の旅費を辨ずる能はず。空しく日を送り居たりしが、斯くては何れの日か、歸國するの期あらんとて、種々工夫の餘り不圖思付きて、汁粉屋を始めたり。素より是れとて資本あるにあらずれば、知己の日本人より茶碗器具類までも借受けて開業せしものなるも、彼れは夫れより追々と仕上げて、僅に半年立つや、立たずの間に如何に工風しけん一躍して料理店と化け出し、今は二三人の仲居までも使役する平壤屈指の料理店となれりといふ。

仁川に天草人某なる者あり。今を距る七八年前、僅かに渡航旅費丈けを



携へ夫婦にて渡韓したりしが、最初一錢の資本すらなきが故に止むな  
く夫婦分れ／＼となりて、他人の家に奉公し居たりしが、其得る所の僅  
かの給金を蓄積し、其れを資本として豆腐屋を始め今日にては最早壹  
萬餘圓の身代を作り、盛んに綿の輸入貿易に従事し居れり。  
昨年春頃なりき、足藝などにて世を渡る何某なるもの平壤に來り、一  
週間計り興行して支那の安東縣に赴きしが、會ま義和團の騒ぎ起り、再  
び平壤に逃げ來り居る間、空しく徒食せんよりはとて、其妻が多少三味  
線の心得あるを幸ひに、藝妓營業を始めたりしに、一ヶ月の收入百圓以  
上に上りければ、亭主は其れを資本とし、最初小間物屋を始め、漸次擴張  
して今は可なりの呉服店となれり。  
元來朝鮮は何事も開けざる所なるが故に、少しく氣の利きたる事業を  
始むれば、大概當りを取らざることなし。云はゞ至て金の儲かり易く、暮  
らし易き所にて、例へば大工の賃錢一日壹圓七拾錢、理髮料三拾錢と云

ふ物價なれば朝鮮産の物品は何れも日本に比すれば三四割安く、白米  
壹升の價十二三錢位、其他の物價も之に準して廉なり。左れば日本に在  
る積りにて節儉せんには、夫婦暮らしにて一ヶ月十二三圓あれば充分  
なるべきか。而かも朝鮮に在留する邦人は、動もすれば贅澤に流れ奢侈  
に奔るの状あり、是れ畢竟金の取り易き結果たるに外ならず、彼の支那  
人の如きは常に粗衣粗食に安んじ勤勉力行するが故に、一厘なしにて  
來りしものも、數十萬圓の身代を作るに至る。内地行商及び居留地附近  
に於ける農作の如きは、悉く彼等の手に依て爲されつゝあり。在留日本  
人が如何に贅澤なるかは平壤に於ける日本料理店の繁昌によりて推  
測するを得べし。方今平壤在留の日本人のみを目的とする料理店五軒  
あり、戸數十戸に付て一戸の料理店ある割合なり。右は只だ在留日本人  
のみを目的とする者にして朝鮮人等の來り遊ぶ者は殆んど無し。平壤  
には右の外に朝鮮の妓生家なるものあり、日本人にして其妓生家に浪



費する金額も亦た尠なからずといふ。是等を見ても日本人の濫費多きを知るに足るべく、如何に金の得安きかを推するに足るべし。又朝鮮に於て最も需用多きは日本婦人にして、下女の如きは一ヶ月の給金七圓位、其外に月々湯銭、髮結銭等を與ふ。其れすら中々得難くして、家族の多き家杯には容易に來らざるなり。

方今釜山、仁川、京城等に在りて紳商と云はるゝ人々は、多くは瑣細の資本より遣り揚げたる人ならざるはなく、且つ以前より商業家たりし者稀れにして、多くは船乗り、巡查、警部、官吏の古手、書生上り等なり。また是等は概して十年乃至十五年位の間に仕上げたるものなり。要するに朝鮮に於ては外交上に取りてこそ由來何一つ成功したるものなく、一として失敗の歴史ならざるはなきも、日本人個人としての事業は何れも成功せるものと謂ふべし。

半島の情況夫れ前記の如し、故に一たび朝鮮生活の味ひを覺えたるも

のは、本國に歸らんと欲する者寡く、中には故郷を慕ふて一旦歸國せしものも、本國の生活意外に困難なるに堪へずして、再び渡韓する者を多しと爲す。蓋し内地に在りては、税金の如きも國稅、地方稅、町村稅、協議費杯と幾多の負擔ありと雖ども、朝鮮にては只だ居留地に於ける自治團體の費用を負擔するに過ぎず。其他營業上にも、日本にては種々繁雜なる取締規則等ありて頗る面倒なりと雖とも、朝鮮在留民には毫も更に斯る制裁なし、故に何事も甚だ氣樂なり。

### 半島移民獎勵策

半島の地質に水陸の遺利甚だ多し。而かも朝鮮の人民は皆な此天物を暴殄して顧る所なし。是れ我が絶好殖民地にあらずや。我が國人口の増殖すること年々幾百萬人限りある疆域の中に將來限りなき増加の人口を收容する能はず。幸に彼の半島の地たる氣候稍や寒なりと雖ども猶ほ北海道に彷彿たり。况んや三南と稱する南方の全羅、忠清、慶尙の各



道地方に至ては、其氣候殆んど我が國本土と異ならず、而かも我が國と僅かに一葦水を隔て、殆んど呼ばゞ答へんばかりの隣近地たり。若し夫れ京釜鐵道開通の曉に至らんか、九州沿岸の地より彼國中央部に至る僅かに一晝夜にして達するを得べけん。然らば則ち我が殖民の地を擇ぶとせば、半島の地を除きて其れ何れぞや、抑も對韓政策に付ては世上種々の意見ありと雖ども、兎に角移民の獎勵より急なるは無かるべし。朝鮮政府の改革も、盲昧人民の開導も、多數の我が民を彼地に植付け、て自然に我れに同化せしむるより善きはなき也。今日我國民の半島に在る者僅かに貳萬人に過ぎず、而かも韓國に於ける利權の大半は日本人の手に占有せり。郵便、電信、鐵道、航海權の如き交通機關は殆ど皆な我れの占有する所たり。其他商權の如き漁業權の如き、概ね亦た我手に歸す。若し夫れ更らに我が民口を増す貳萬ならんか、其勢力は今日に二倍せん、尙ほ増殖して十萬に至らんか、其勢力は今日に五倍せん、更に進ん

て百萬に至らんか、則ち其勢力今日に五十倍すべき道理なり。故に半島に對する政策は決して他に六ヶ敷研究を要せず、只だ移民策さへ執れば足るなり。既に移民を以て對韓の上策とせば、宜しく大に之れが獎勵法を講ぜざるべからず、此點に就て余は少しく研究したる所あり。左に卑見を陳ぶべし。

第一、自由渡航を許す事。今日とても従前に比すれば餘程自由の方針を執るに至りしと雖ども、未だ充分と謂ふ能はず。婦人の渡航には今日猶ほ甚だ干涉に過ぐるものあり、或は醜業婦の渡航を防止せんが爲めなるべきも、凡そ移民を獎勵せんには婦人の渡航を自由にせざれば充分の結果を得難し。殊に醜業婦とても決して防止するに及ばず。歐米諸國ならば、イザ知らず朝鮮國の如きは由來風俗腐敗の國なるが故に、假令何十萬の醜業婦渡航するとして、決して痛痒を感ずるの國にあらず。又旅行券の如きは有ても無くても、毫も利害なし、寧ろ廢するに如かず。



又退韓條約の如き、今日に於ては毫も其必要を見ず、犯罪者あるときは彼國に於て處分して可なり。要するに朝鮮に渡航することは恰も我内地を旅行すると同一たらしむるを可とす。

第二、徵兵猶豫を與ふる事。歐米諸國に旅行したる者には、徵兵猶豫を與ふれども支那朝鮮への渡航者には之れを與へられず、是には別に仔細の有るべきも、移民獎勵の策としては、是非此方法を朝鮮にも適用するの必要あり。

第三、渡航費を低廉ならしむる事。朝鮮航海船には政府より特別の補助金を與へ、今少し渡航費を遞減せしむるの必要あり。少くとも内地沿岸船賃と同様ならしむべし。

第四、朝鮮に興業銀行を起す事。内地に於ける農工銀行の如きものを作り、渡航者をして事業を得せしむるの資金を貸與すべし、朝鮮にては金利非常に高く、通常一ヶ月五歩乃至八歩にして、我が居留民は其資本

を得るに頗る困難なり。故に是等の機關を設けて資本の融通を圖るは、彼の利源を開發するに於て甚だ必要なり。

第五、若し國家經濟の上に於て爲し得べくんば、半島より日本に輸入する物貨の中にて、日本人の手にて輸入する未製品丈は、關稅を免除する事。

第六、外交上の手段を以て爲し得べくんば、京城義州間、京城元山間、元山平壤鎮南浦間、及び其他必要なる線路の鐵道敷設權利を獲得する事、尙ほ右の外にも種々の策あるべしと雖ども、差當り右の方法を執るに於ては、我が内地に於ける落魄者は大に奮て渡航を企つるに至る可し。又近來或る論者の唱道せる如く、京釜鐵道の停車場設置の地より一里四方の區域内を以て土地の所有を得せしむるの權利を要求するも、亦た上策なるべし。嘗に京釜鐵道に限らず、今後敷設する鐵道線路は何れも此方法を以て土地所有權を要求せば、五萬十萬の移民を容るゝには



充分なるへきなり。斯くて各停車場には何れも日本的商業市街を創設し、其の四周は我が農民及び工業者を以て圍繞するに至らば、半島の遺利は舉て我が手に歸し、經濟上に於ける半島死活の權は、悉く我が手に歸着せん。半島の開導扶掖是に於てか全きを得るに至るへきなり。

近來我國にては多くの移民會社起り、頻りに布哇若しくは南米濠洲等に移民を圖りつゝあるも、是等移民と云はんよりは寧ろ出稼なり、獨立の營業にあらすして勞働者として雇はるゝものあり。朝鮮半島の移民は然らず。彼地に獨立自營せしむるものなり。諸外國に移民せしむるは恰も碁を圍むに當り對手の作りたる目の中に死石を投するに異ならず。朝鮮に民を移すは決して之れと同じからず、即ち經濟的領分擴張の根原となるものなり。伊藤侯の内閣は露西亞に對して常に遠慮する所あり、支那朝鮮問題に就ては、兎角事勿れ主義を執り、勉めて平和政策を奉ずるものゝ如し。果して然りとせば、専ら朝鮮の利源開拓と移民獎勵

策の如き、蓋し是れより平和無事の策はなかるへし。伊藤内閣にして若し此手段すらも憚るとせば、寧ろ半島に熨斗を付けて他國に進上するに如かざるなり。否、百年の後には、我が本國も遂に安全に我が有にあらざらんことを思はざるへからざるなり。

歸 朝

京城仁川の間に留まること殆ど一週間、其間京城に於ては居留民總代理場、に於る居留民の歡迎會、日本公使館に於ける林公使權助の晩餐會、其他居留民の寫真協會、舊知青年の晝餐會等に招かれ、仁川に於ても居留民役場に於る居留民の歡迎會、八坂樓に於る有志懇親會、伊集院領事(彦吉)の晩餐會等に招かれ、滞在日數の少きに比して、土地の事情を知るに頗る便利を感じること多かりしが、既にして日本郵船會社汽船肥後丸は、北清より歸航の途次、仁川に寄港し、更に神戸に直航するあり。故に余等は二十五日之に乗る。肥後丸は今度の事變の初、太活に於て徵發せ



られ、太沽砲臺攻撃の際に戦死したる海軍中佐服部雄吉氏等の遺骸を始めて本國に運びたりし船にして、今は御用船を解かれて本國に歸るなり。午後三時仁川を發すれば、今回は定期船ならざるが爲めに、船客甚だ少なく、船室には僅に英米人兩三人ありしのみ、故に船中の窮屈も極めて少なく、加ふるに日々快晴にして海波頗る穏かに、恰かも平地を行くが如く、二十七日の正午馬關の海峡を過ぎ、神戸に着したるは翌日の午後にて、京阪の間に數日を費やし、東京に歸りしは十月卅一日の午前十一時なりき。

北清觀戰記終

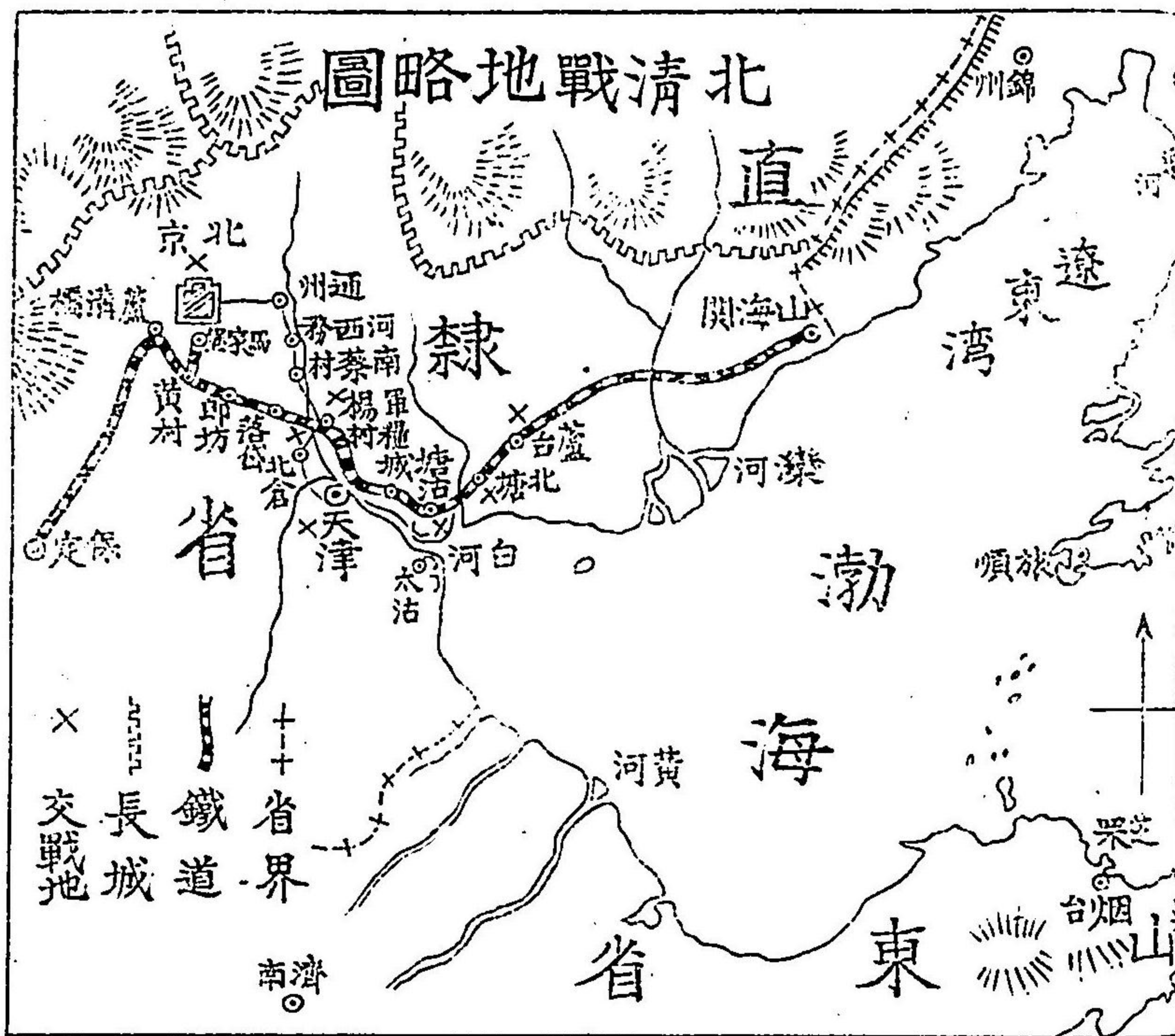
附錄

北清戰地地誌

戰地概説

今回北清の戦争は、清國に對して日、英、露、米、獨、佛、埃、伊、の八國の交戦にして、其の戦鬪行爲は六月十七日の太沽砲臺攻撃より十月廿一日保定府占領まで、百二十八日に亘り、兵火を交へたる疆域は單に直隸省のみならず、滿州を包容す。而して其の戦鬪の最も激しく且つ久しかりしは天津と北京とにして、天津の交戦は三十日に亘り、北京は六十日に連りたり。此の兩地を中心とし、戦争は京津鐵道及天津山海關鐵道に沿ふて實行せられ、即ち天津より山海關に通ずる沿道は、太沽、北塘、蘆臺に戦ひ、天津以北は北倉、楊村、北京に於て戦へるものにて、其他豫、魯、鄂、皖、等も實際戦鬪なく占領せられしは、通州、山海關、及保定府なり。若し夫れ





線なり、また北京より保定府に到る既成線は、蘆漢鐵道と稱す。是れ北京城西なる蘆溝橋より起り、保定府を経て遙かに漢口まで延長する大計畫の官設線なればなり。而して蘆漢鐵道は北清鐵道の豊臺停車場より分岐して起る實に北京城外の馬家堡停車場五哩の地にあり。方今北清鐵道の線路は、北京馬家

滿州地方に至りては、當初清國の暴徒も猖獗を逞くし、露國の敷設したる鐵道を破壊し、後に露國人は見當り次第に清國人を虐殺したるのみにして、兩國軍の砲火を交へたることは極めて少なかりしなり。去れば實際の戰闘地は、太沽より天津を経て北京に通ずる間なる白河の河沿いと鐵道とに沿ふたる區域内に在り。故に今回北清戰爭の顛末を知るには、先づ其の交戰地の地勢を知るを必要とす。余は幸ひに戰爭後此等の地域を跋涉し、太沽、天津、北倉、楊村、南蔡村、河西務、通州を経て北京に到り、萬壽山の離宮まで一巡し、畧ぼ戰地の形勢を視察せり。故に以下其の地勢を説きて以て戰爭の顛末を知るの便に供せんと欲す。而して其前に先づ今回の交戰地略圖を掲ぐることに、最も讀者の理解に便なるを信ず。

下掲の地圖と共に、先づ鐵道の線路に就て説明を要す。此の既設鐵道中、北京より天津、太沽を経て山海關に達するものを北清鐵道と稱し、官設



堡より天津までは七十九哩六十八鎖の複線にして天津より山海關までは百七十四哩の單線なり。故に北京より山道關までは通じて二百五十五哩といふ。また蘆漢鐵道の既成線は北京豐臺より保定まで八十八哩なり。今天津を起點として北方は北京まで、東南は山海關まで主要なる各停車場の距離を示せば次の如し。

天津より北京の方へ	天津より山海關の方へ
北倉まで 八六一	軍糧城まで 一七
楊村まで 一七八八	塘沽まで 二七
落岱まで 三一〇九	蘆臺まで 五一
朗坊まで 四〇四〇	唐山まで 八〇
南淀まで 五三六四	灤州まで 一一三
黃村まで 六四四七	北戴河まで 一五二
豐臺まで 七四八八	山海關まで 一七四

北京(馬家堡まで)七九六八

以上の線路の外に、山海關より北方に接続して關外鐵道あり。山海關より百十三哩にして錦州を經更に牛莊に達する線路は、工事既に落成し、露國の滿州鐵道に接続すべき豫定にて、英清共同名義の下に敷設せらるゝものなるも、今回の戦争に關係薄ければ此に説かざるべし。

北京山海關間の線路は、變亂前までは日々三回往復し、其中一回は急行なり而して其の車輛には頭等(第一等の謂)二等、三等の三種の外に、特別車なるものあり。軌道は四呎八吋の廣軌式にして、車室内も日本内地に普通なる三呎六吋の狹軌式に比すれば甚だ廣き上に、其の特別車なるものは、寢臺と爲るべき腰掛四個ありて、二た間に區別せられ、食卓あり、椅子あり、便所あり、洗面臺あり、平時は一人のボーイ附屬すと云ふ。是れ沿道に適當のホテル無き故、旅客は客車中に宿泊するを得せしむる爲なり。而して曾て戰亂前に天津より此の特別車に乗て山海關まで往復



したる人の實驗談によれば、午前八時天津を發し、急行にて山海關に達せしは、其日午後二時五十分なりしとぞ。急行とても沿道の主なる驛の塘沽、蘆臺、唐山、古冶、灤州、昌黎、北戴河には停車するものにて、而して其の頭等客乗車賃一人四弗五十六仙、外に特別車一輛借切賃天津山海關の片道十六弗づゝと、別に滞留せば特別車留置賃一夜九弗なり、故に第一日には山海關を見て車中に宿し、翌日は北戴河に下りて秦皇島邊を巡視し、其夜また車中に宿し、三日目に午前八時三十分急行車に繋ぎて北戴河を發し、午後一時五十分天津に歸着せりといふ。余は事變後九月二十四日に塘沽に上陸せしに、當時鐵道は露國軍の管理に屬し、塘沽より天津まで三時間を費やせしが、歸路十月十二日は同じく露國軍の管理なりしも、鐵道の修理漸く成りて、天津塘沽間は二時間にて到着したりき。

斯くの如く鐵道は今回の戰亂地を一貫して通ずるも、戰亂の始に於て、

義和團の暴徒は盡とく鐵道を破壊し、何れの部分も全く用ふる能はざらしめたり。故に各國軍の進退も兵站線も盡とく鐵道以外に由るの外無く、此に於て白河の河流は戰爭中唯一の交通線と爲れり、何となれば此の河は源を山西省に發し、直隸省を貫通し、北京の東北方を流れ、楊村に至りて鐵道線路と合し、北倉天津を経て天沽に到り海に注ぐ。其間常に鐵道と並行し、而して舊時鐵道の敷設せられざりし前、北京天津間の貨客運搬の爲に唯一の水路なりき。故に北京を距る五里なる通州までは、日々數千のジャンク船を往來し、僅に通州北京間丈けを陸運に依れば、南方各省の貢米も、皆此の水路によりて北京に輸送することを得るなり。實に白河は北京の爲のみならず、直隸全省の爲に咽喉なり。天津市街は其の河岸に在るが爲に、人口六十萬の大都會を爲し、通州もまた其の河岸にあるが爲に、北清屈指の大市街を爲すなり。去れば鐵道を破壊せられたる聯合軍は、太沽より天津に通ずるにも、白河に由り、既に天



津の敵を掃蕩したる後も、北京に進むには専ら白河に沿ひ、北倉、楊村、南蔡村、河西務、馬頭、張家灣の各地を過ぎて通州に入り、此所より河に離れて北京に向ひたり。而して軍隊は河岸に沿ふて進行し、糧食は皆な河中の船運に依頼したれば、人を勞すること少くして、運搬に不便を感ずること無ししは、一に白河の賜ものなり。

白河は一に九十九曲り河と稱せられ、其の白といふは百の字の一を減じたる隠語と呼ばるゝほど屈曲多く、且つ河底深からずして河水は甚だしく濁り、其の汚泥の流るゝが爲に河底は年々に高く、太清天津間は僅かに小蒸漁船を溯らしめ得るも、天津より上流は小蒸漁船をも進む能はず、唯だジャンクと名くる船の底の平かにして幅廣く、恰かも短冊國を縦に微しく切り締めたるが如きを上下せしむるのみ。其の河幅は天津に於て約二百尺、通州に於て約百二十尺許にして、沿岸には堤防も無き河流ながら、水勢は極めて緩く、土地に降雨少なき爲に洪水の暴

漲少なく、冬期氷結する間の外は、日々間斷なくジャンクを上下せしめて、天津市街の河岸若くは楊村、通州等の河岸には帆檣常に林立し、曾て余が天津停車場と紫竹林居留地の間の舟橋を渡らんとせしに會たま船舶通過の爲に舟橋を解きしかば、暫らくジャンクの通過を待ちながら、試みに其の隻數を數へしに、上るものゝみ八十四隻を連ね、其間に一時三十分許を費やしたり、十月十二日其の船舶往來の頻繁なるを以て推知すべし。而して此等の船舶は、戦亂中盡く各國聯合軍に占領せられ、専ら聯合軍の使用に供せられたるなり。故に聯合軍は、鐵道破壊の爲に、瀛車を利用する能はざりしも、之に代へて白河の水運を利用し、毫も不便を感ぜざりしことは、戦争の形勢を知る上に於て頗る注目すべき所なり。

若し夫れ鐵道に由らんか、天津より北京に入るには、北倉、楊村より落岱、郎坊、黃村、馬家堡を経て北京城の永定門より攻撃すべかりしに、鐵道破



壞の爲に、此等の地方は連合軍の蹂躪を免かれ、之に反して南蔡村、河西務、通州等は、聯合軍の爲に甚だしく蹂躪せられ、北京城の攻撃も、通州口なる朝陽門、東直門に於て最も甚だしかりしことも、また鐵道と水路との關係より來りしことを知るべきなり。

太沽及塘沽

今回北清の戰爭地誌を叙するには、先づ第一に太沽を説かざる可らず。何となれば清國官兵と聯合軍とが始めて砲火を交へたるは此地なり。また何れの國の兵も今回の事變の爲に北清に派遣せらるゝや、其の上陸地は總て此地なりき。其後冬期氷結の爲に上陸地を山海關に移したるも、是れ唯だ冬營中の通信發着所たるに過ぎずして、各國軍隊の着發は殆ど太沽に於てせり。白河の河流も此所に至て海に注ぎ、北清鐵道も此所に於て山海關線と北京線に分かる。故に鐵道修理成り、一方には天津、北京、保定に達し、他の一方に山海關線に接續するにも、水陸運輸の連

接は主として太沽に於てす。實に太沽は北清戰爭の最初の爆發地にて、また北清戰地の咽喉なり。

威海衛を左に見て旅順口を右にし、渤海の中に入て航行すること約一晝夜にして太沽沖に達すれば、陸岸を距ること三四哩の海上に軍艦商船の輻輳して碇泊するを見る。是れ太沽沖なり。芝罘より太沽まで水路百五十四里、太沽は白河の河口なるも、彼の白河より晝夜間斷なく泥沙を流出し、爲に海面遠淺にして大艦巨舶は陸に近づく能はず、故に皆な海上遠く碇泊し、唯だ千噸以下の小蒸氣船と、砲艦、水雷艇のみ河中に溯るを得るなり。而して此の沖合より陸上を望めば、白河の河口兩岸に、北岸に一個、南岸に二個の砲臺の對峙するを見る。是れ太沽の砲臺なり。而して上陸地は此の砲臺の前を過ぎ、河を溯ること十町許の上流に在り。河を溯るに當り、更に東岸に第二の砲臺あり、若し嚴重に之を守らば、前面より攻撃して之を陥ゐるとは頗る困難ならん。然れども今回開戦



の當時には、我が砲艦愛宕鳥海及外國の砲艦數隻は其の砲臺前よりも更に上流に碇泊し、戦端開くるや、上流より上陸して逆さまに河口に向ひ、砲臺の背面より攻撃し、偕は白河北岸の第二砲臺は、日本軍の先登によつて最先に陥落したるなり。

此の砲臺の前を上流に溯ること十町許にして、兩岸に市街あり。東は東沽西を西沽といふ、人口三千餘ありと云ふも、市街は甚だ不潔なり。之を溯ること十町許にして、塘沽に達す、人口は五六百なるも、停車場あり。北は天津北京に通じ、東は山海關に連なるなり。上陸して鐵道に乗るには必ず此に於てするを要す。去れば將來白河の河口を浚濬し、大船舶を河口内まで進入せしめば、此邊一帶の地は通商上頗る重要な地となるべし。

太沽より天津まで、鐵道は白河の左岸を走り、塘沽より軍糧城を経て天津市街の對岸に通ずるも、普通の道路は白河の右岸に沿ひ、西沽より四

里弱にして楊會庄、また十丁許にして新城更に三里半許にして小站に達す。其間丁葛沽、鹹水沽鎮等の村落あり。小站は曾て現時の山東巡撫なる袁世凱の駐城したる所といふ。小站の北は南楊、馬頭、白鶴口子、双江、灰堆、河圈子、鄭塘庄、靳家窩、東樓等の各村落を経て、天津紫竹林の外國人居留地に達す。總て太沽天津間は陸路三十里、水路五十里と稱す。日本里程に換算す、其の沿道は道幅約四間、道路正しく修理せられ、路傍は柳樹を植ゑ、交通に便なり。沿道の村落には人烟稠く、土地も能く耕やさる。唯だ飲用水の乏しきを困むのみ。之に反して白河の左岸鐵道に沿ふの平原は、村落極めて少なく、土地また未だ耕やされず、而して滿目の平野際涯無きは、左右兩岸みな同じきなり。

天津城及同居留地

天津は今回の戦争に於て最も重要な地位にあり。清國兵が外國人居留地を圍みて全く之を擧げせんと企て、交戦三十日餘に連なりしも、此所



なり。聯合軍が最も久しく苦戦して後終に之を陥れ、因て以て戦争の大勢を決定したるも此所なり。而して太沽より上陸したる聯合軍が、北京に進むには是非とも通過せざる可らざる關門にして、聯合軍の鮮血は最も多く此地に流されたるなり。

天津は直隸省天津府天津縣の治下に屬し、實に白河の河口より上流五十里の右岸に在り、北清鐵道の停車場は、其の對岸に在り。芝罘まで水路百五十四里、上海まで六百八十七里、牛莊へは二百三十五里、日本の長崎までは七百八十九里といふ。往年一千八百五十八年の天津條約により開港場と定まり、同六十一年に開港したるにて、現時人口六十萬と稱せられ、北清に在ては北京に次で最も繁昌なる市街なり。此地は南方江蘇省の揚州より山東省を貫ぬきて直隸省に達する大運河と白河との合流する所に於て、南北貨物集散の中心たるのみならず、太沽より内地に入るには鐵道によるも水路によるもまた必ず此所を經過せざる可ら

ず。故に古來此地に天津府城を置て防備の要鎮と爲し、近年直隸省の總督衙門も此所に置き、また陸海の兵學校、大學、兵器製造所等を設け、其の駐防兵は全國の精髓と稱せらる。而して開港後佛英米獨の各國居留地は、府城の西南白河に沿ふて紫竹林と名くる區域に設けられ、今は層樓石屋簷を接して起り、上海を除けば清國內第一の繁盛なる居留地と爲りぬ。而して此の居留地こそは今回の戦争中對岸の停車場と共に天津府城の清兵の爲に久しく攻撃せられて非常の苦戦を爲せる所。後に日本の援軍大に到るに及び、守勢を變じて攻撃を執り、終に天津城を攻撃して近來の激戦を演じたる後に之を陥れたる所なり。

白河の河幅は天津にて大約二百尺、毎年冬季には全く氷結し、船舶の往來止むも、平時は運河によりて南方より來る貢米船と太沽に碇泊する漁船の貨物を運ぶものと、皆な此に集まり、而して其の天津に泊するや昔な河岸または埠頭に繋ぎ、絶て河中に錨泊するの必要なし。故に貨物



の積卸船客の昇降には極めて便なり氣候は夏季に於て華氏の寒暖計九十度より百五度に上ることあり冬季は二十五度より五度の間を昇降し寒熱の差違甚だしく而して其の嚴寒中白河の凍結するや結氷の厚さ一尺五寸許に上り凍氷の上に車を走らすに運搬の便は水運に勝るものありといふ。

此地往昔は匪賊鎮壓の爲に設けたる一衛所に過ぎざりしも後年貢米船の輻輳するに及び清朝の乾隆四十七年河間府より割て別に府治を置きしなり其の地位の南北交通の要衝に當り水陸運輸の接續に便なるを見て歐羅巴人は早くも將來の繁盛を察し廣東の暴動を機會とし千八百五十八年五月英佛同盟して兵威を示し開港の條約を結ばんと欲し艦隊を率ひ來りしに圖らす太浩砲臺より砲撃せられしも終に之を陥れ進んで天津に溯り其年六月平和條約を締結し翌年六月條約を實行せんか爲に再び白河を溯らんとするときまたも太浩にて砲撃

に遭ひ此時には砲臺を陥れる能はずして一旦退却し其翌六十年八月英佛同盟軍は太浩の東方なる北塘より上陸して太浩の背面を攻撃し一舉して之を陥れ直に天津に進み更に進んで北京も陥れたり。

其後千八百七十年六月天津の土民蜂起し佛國宣教師が土民を誘惑し心肝を抜き取ると訛傳し終に佛國の天主教會堂を焼き佛人七八名を虐殺し爲に佛國との間に大紛議を生じたりしも清國政府は八十萬兩の償金を出して事無く其局を結ぶを得たり爾來直隸省總督衙門を保定府より天津に移し總督は常に此地に駐まりて地方を彈壓し且つ外交上の事務を處辨し唯だ冬季白河の結氷期間のみ保定府に歸て事務を執ること爲し且つ此時より同盟各國中何れの國の軍艦も常に一隻づゝを碇泊すること爲れり近來大學校及陸海軍大學を首とし各種の設備を此に置き此地のみは盛んに泰西の新事物を採用したるは多くは李鴻章が直隸總督として此に駐まりしときの創設に係る而し



て今回事變の初に我が砲艦愛宕の白河中に碇泊して能く太沽砲艦背  
面攻撃に先登の功を奏し、は平時軍艦を碇泊するを得るの條約に原  
づくものなり。

天津府城は白河と運河の合流する岸にあり、四方に城壁を繞らし、全長  
一里十丁五間、城壁の高さは二丈四尺にして四方に門あり、東は鎮海門、  
西は衛安門、南は歸極門、北は帶河門と名くるも、普通に東門、西門、南門、北  
門と云ふ。城内は此四門を通じて四大街を爲し、中央十字形を爲す所に  
鼓樓を設け、其の街路を鼓樓大街といふ。此の城廓外に更に壕に沿ふて  
土塙を繞らし、之を外城と爲し、長さ五里七丁十二間、土塙の高さ一丈四  
尺、之を僧格林沁堡と名く、そは英佛聯合軍の攻撃を受けし後僧格林沁  
なる者の經營するに由るといふ。外城の要部には十四の門を設く、其の  
名稱は、山海門、鎮東門、直沽門、梁園門、東南門、海光門、西城門、三慶門、順軌門、  
保衛門、綏豐門、拱辰門、堤上門及び錦衣門といふ。而して此等の外城は城

外遙かに田野の間に築き繞らされ、市街は多く府城の内に在り。然れど  
も城内の道路は狭くして且つ穢なし、而して市街の最も繁華なるは東  
北門外に於て白河の岸に在り。河岸の市街は、府城より下流の西岸に沿  
ふて約一里に連り、紫竹林の外國人居留地に接続す。

居留地は從來佛英獨と連りしに、近來日本の專管居留地は佛租界と支  
那人町の間に定められ、乃ち居留地中最も支那人街に近き所に在りて、  
一方は白河に沿ひ、一方は田野に連なる。然れども我が居留地内には從  
來我が國民の住する者無く、三井物産會社支店または横濱正金銀行支  
店等は佛租界に在りき、各國居留地中英租界は最も中央の位置を占め、  
富商大賈の大半は此邊に在り、從來清國の招商局、怡和、太古等の漁船會  
社の埠頭もまた此附近に在るを以て、河岸には大小船舶輻輳し、貨物の  
積卸織るが如し。佛租界は恰かも停車場の對岸に在り、故に停車場の前  
に舟橋を架し、之を方今俗に佛蘭西橋といふ。橋はジャンク船十數隻を



駢べ、兩岸各數隻は常に繋ぎ留め、中間の二三隻だけ容易に解放し得る様にし、船の河流を上下するもの數隻集るに及び、中間に繋ぎたる舟を解きて水路を開くなり。而して天津を上下する船は日々數百隻なるが故に、橋を渡らんとするに臨み、會また中斷せらるゝときは、其の接續までに數時間を要し、其間數十百隻の舟の通過を待つことあり。清國に有名なる釐金税は斯かる舟橋又は關門ある所には、收税吏其地に臨み、常に通行の貨物を檢して太約の價格を算定し、税を徵收すること恰かも日本内地にて橋錢又は渡津錢を収むると同じきなり。

方今天津に在る各國領事館は日、英、獨、露、佛、米、伊、奧、西、葡、蘭、白の十二にして日本領事館は獨逸の居留地に在り、居留地の中央を貫ぬく大道は、南は、小站を経て太沽に通じ、北は天津府城を貫きて北倉、楊村、河西務、通州を経て北京に通ずるなり。天津の東器機局と稱する兵器製造所は白河の左岸、停車場の東に在りて、盛んに大砲、小銃及彈丸を製造し、武備學堂

と名くる陸軍大學校も、停車場の下流なる白河の左岸にて、獨逸居留地の對岸に在り。此等の兩大建築は、今回の事變中露西亞軍之を占領せり。停車場は、居留地の東北より進撃し來る敵を防ぎて日本軍の久しく苦戦したる所なりしも、其の建物及鐵道を併せて露西亞軍之を占領し、鐵道事務は暫らく露軍之を管理したり。また天津は多く鹽を産し、白河の左岸は佛國居留地の對岸より英國居留地の對岸まで十數町に亘り、鹽を以て山を爲し、蜿蜒として堤の如くなりしものまた露軍之を占領す。其の鹽の在る所は停車場より河岸に達する間にして將來水陸運輸上最重要地たらんとす。露人は其の鹽よりも寧ろ眼を土地に注げるが如し。鹽山の上流、府城の對岸は、水師營とて海軍砲を備へ、砲臺あり之に由て停車場の我が守備隊と在居留地の聯合軍は、久しく困しめられしも、天津城攻撃の日、我軍之を攻めて占領せり。また南門の外十數町海光門内の田野中に海光守器機局といふ兵器製造所あり、其規模は東器機局



に比ぶれば半ばに及ばず、また戦闘の衝に當り、焼けて全たく破壊せられたるも、日本軍が激戦して之を陥るれ、勝利の紀念として占領する所なり。

### 天津北京間の通路

天津より北京に到る道路の主要なるもの三線あり、甲は楊村武清縣より黃村蘆溝橋を経て北京に入るものにして、里程約三十三里、天津北京間の鐵道は此の線路に依る。乙は楊村より河西務、張家灣、通州を経て北京に入るものにて、里程は二十八里四分の三、甲の線路に比すれば更に近く、且つ天津通州間は白河の水路を利用し、通州北京間また運河あるが故に、運搬の便最も多かりしかば、鐵道開通前は交通上唯一の捷徑と見做されたり。而して今回事變の初に於て、鐵道は沿道悉く破壊せられたれば、聯合軍の進路は乙線によりし故、今回の戦争には最も詳かに説くの要あるなり。丙は天津より西に永定河の南方を永清、固安の二縣を

經て蘆溝橋より北京に入るものにて、此の方面には永清縣までは永定河の水運を利用するを得れども、其れより上流は河底淺くして、荷船を通じがたし、陸路また甚だ迂廻するを以て、平生天津北京間の通路と爲さず、唯だ鐵道を破壊し、白河の水中に障害物を沈め、また其の沿道の要害を扼守せば、北京攻撃の戰略上一軍を此の方面より分ちて進むの要無しとせざりしなるべきも、今回の戦争には、天津陷落後は清兵の主力既に沮喪し、僅に北倉楊村に於て暫時の抵抗を續けたるのみにして、昔な北京へ退却したれば、丙線路は毫も注意を曳くの要無かりき。去れば今は聯合軍の進路に隨ひ、主として乙の線路に就て述ぶべきなり。

### 白 河

天津より北京に進むに今回の聯合軍は實に楊村、河西務、馬頭、張家灣、通州の各市街を經由したり。而して天津より通州までは白河に沿ふものにて、途上北倉、楊村等の戦争は、白河を挿みて行はれ、後に各國の兵站部



は一に此の水路によりて運搬せり天津通州間は陸路約二十四里即ち天津より

北倉まで	三里	楊村まで	七里
南蔡村まで	十里	河西務まで	十三里
馬頭まで	十九里	張家灣まで	二十二里
通州まで	二十四里		

なるも河流は屈曲甚だしく此間の水路四十里なり而して天津の上流には河底淺くして小蒸汽船をも進むる能はざるも、ジャンク船は間斷なく上下し平時此間に六千隻ありといふ其船は長方形の箱の如く上下平かにして底淺く、以て河底淺き水路にも漕ぐことを得せしめ、舳頭に鬼面の如きものを畫き、船内を横に數區に劃し、貨物を積む所と船頭水夫等の夜間寝る所と爲し、甲板の上に客室を設く其客室の普通なるは左右より篷を曲げて穹窿形を爲し、恰も赤壁の圖などにて見る船中

の篷の如し、其の上等なるは上下左右前後とも板を以て圍み、其の横なる板は一枚ごとく開閉自在と爲し、客を其中に居らしむ。船の長さは舳より艫まで六七間乃至十間にて、幅は前後端稍や狭く、六尺許、中間は一丈乃至二間、客室は甲板の前方三間、後方二間許づゝ、殘して設け、帆檣は客室の前端に樹立し、船頭は客室の後方に在り、棹を執り、水夫は舳より棹さして客室の左右舷を歩し、舳艫の間を往來する故に兩舷に一尺許づゝの歩行すべき餘地を存す。而して船を進むるには、帆と棹と綱とを併せ用ゐる。天津市内の河中にては多く棹さして上下するも、上流にては檣の上より長く綱を着け、水夫數人遙かに河岸を歩して之を曳く。帆は布を縫ひ合はせ、横に數十本の竹を附け、また帆綱には數十個の滑車を裝し、河の屈曲に會ふ毎に帆を左右に轉じて風を利用するに便す。每舟船頭水夫及び炊夫とも大概七八人を載す。舟の進行は甚だ鈍く、天津より通州に遡るには普通に六日、下るには三日、中間一日滞在し、往復十日



を要するを常とすといふ、而して古來清國各省より水路を利用して北  
 京に貢米を送るものは皆な此の水路に由り、其の貢米船の形狀は他の  
 舟と同じきも、舳頭の鬼面畫は丹青を以て彩る故、一見して貢米船たる  
 を知るべし。而して其の船には四十乃至六十石を積むを得ると云ふ。  
 白河の河幅は天津市中にて五十間、北倉邊にて三十間乃至四十間、通州  
 に至りて二十間許、水の深さは上流の淺き所にて五尺、天津附近は概ね  
 八尺許あり、此河は兩岸に堤防なく、河岸は總て畑にて高粱又は各種の  
 野菜と大豆、粟、棉花等を植ゑ、水は黃濁して飲むに困しむも、水勢極めて  
 緩く、また暴漲すること稀なれば、水害は甚だ少く、降雨は雨季と稱する  
 七月中旬より九月上旬までの外は絶無なるも、涸渴すること無しと云  
 へば、運搬には絶好なる水路なり。沿岸飲料水に乏しき爲に、水夫等は河  
 水を汲み、桶に蓄へ、明礬を和し、汚泥を沈澱せしめて飲用す。而して船中  
 に在る者は皆な舷頭より放尿し、又脱糞す、目前に之を見つゝ、其水を汲  
 み、清淨せしめて飲用するなり。

北 倉

北倉は天津より約三里を隔て、天津より楊村に通ずる中間の村落にし

て、天津陷落後清兵は此所に砲壘を築きて防守し、二十日間對抗し、八月  
 五日の激戦によつて撃破せられたる所なり。天津城の北門を出で、運河  
 に架せる鐵橋を渡れば、尙ほ白河に沿ふて市街なり。西沽と名く、市街盡  
 きてまた市街あり、丁字沽といふ。此邊は一帶に北京街道にて、路は堤上  
 に築かれ、兩側處々に楊柳を植ゆ。西沽、丁字沽等の某沽と名くる地名は  
 甚だ多く、天津も舊時は直沽と呼びしものといふ。丁字沽の北方の村落  
 を唐家灣と云ひ、對岸の村落を穆家庄と名く。此邊は七月三十日我が軍  
 の威力偵察を以て敵の兵力を探知したる所故に、西沽、丁字沽を通じて  
 市街は多く兵燹に罹りたり。當時清兵は唐家灣に據守し、我が一軍は丁  
 字沽より砲撃し、別に一隊は河を渡りて左岸の穆家庄より横さまに河



を隔て、唐家灣を砲撃したりしといふ。此邊白河の兩岸は概ね高粱圃にして僅に村落の間に柳樹の林を爲すあるのみ。西沽の北端より道路は河の兩岸に分れ、ともに堤上を道路と爲し、右岸は北京街道の本道なり、河を渡りて左岸に、穆家莊を過れば、次の村落を南倉と稱し、其次を北倉と呼ぶなり。北倉は戸口僅に百戸計りの村落にて、河岸に楊柳茂り、今は我軍の兵站部司令部と守備隊とあり。

楊 村

楊村は戸數一千戸許りの市街にて、河西務と共に天津通州間第一の都會市街は河の兩岸にあるも左岸殊に繁盛なり。天津より此地まで道路は河の兩岸にあり、鐵道は塘沽より天津を経て此所まで河の左岸を走り、此に至りて河を越へ、北京に通ず。其の鐵橋は市街の下流一哩許の地にあり、實に白河々口より此所までは、鐵道と河流と並行するも、此所より河の上流は北方に遡り、鐵道は西方に走る。而して北方に通ずる道路

も兩岐に分れ、一は河流に沿ひ、河西務、馬頭、通州を経て北京に通じ、一は武清縣、拱極城、蘆溝橋を経て北京に通ずるなり。故に楊村は水路の便と交通の衝とによりて自ら繁盛の衝と爲り、市の中央に舟橋を架し、橋は天津にて見し如く、數隻の舟を縦に列ねて繋ぎ、行舟の上下するごとに中央の三隻を離して通路を開くなり。左岸の市街は右岸よりも般賑にして、督河府あり。また其の南口に平時馬隊營あり。北口には天樞閣と名くる閣あり。登れば四方を眺望すべし。此地は八月六日聯合軍の進軍せし時、清兵の抗抵甚だ脆ろく、激戦無くして占領したれば、市街の大部分は兵燹を免かれ、其の督河府は今日本軍守備隊の本部たり。其の背後の屋上に登りて展望すれば、眼界盡とく平坦開濶にして、村落を除くの外一の掩蔽物無く、騎砲兵の威力を逞くするには絶好戦地たり。

河 西 務

楊村より白河の右岸を北進するときは、大頓丘、小頓丘、鐵庄、漢家營、南蔡



村、磚廠、蒙村、西沽庄、小王庄、大王庄、張庄等の諸村を経て河西務に達す。此邊一帶に直隸の大原野、四方總て平坦にして眼界一山岳なく、また一丘陵無し、唯だ村落の間は僅に楊柳の日光を陰翳するを得るのみ。暑時に行軍に困難なる察すべし。南蔡村は日本軍が八月八日に占領し、所河岸に日本守備隊の幕營あり、戸數六百戸あり、既に天津に敗れ、北倉に敗れ、更に楊村に敗れたる清兵は、また一と支へも支へず、楊村以北は抵抗なくして退去したるものゝ如し。然れども沿道の村落は盡とく破壊せられ、或は燒燬せられて、一家屋なく、到る所人影無く、唯だ河岸の圃中に栽培せられたる穀菜の空しく實りて人待ち顔なるを見るのみ。余は九月此の河を溯り、十月また河を下り、沿道所々に上陸し、も終に一人の住民を見ざりき。河西務は戸數一千餘の市街にて、日本の守備隊は河岸を距る二町許の地に舍營し、市街は尙ほ三丁許を離れたる所にあり。此所も河を渡りて東方大官屯より蘆臺に通じ、また此所より西北北京に

も通ずる道路ありて、陸路四通し、河流の便之に加はるが故に商賣甚だ殷賑なりといふ。然れども今は住民四散して雞犬聲なし。幸ひに四方皆拓けて、駐防軍は菜蔬の欠乏を感ずること無し。

馬頭、張家灣

八月八日楊村を發したる聯合軍は、即日南蔡村を占領し、九日河西務十日馬頭、十一日張家灣を占領して、十二日通州に入りたり。其の進行の速かなるは平時の行軍と異ならず。是れ敵の一たび敗走するに及び、疾驅追撃、また敗兵を收集するの暇無らしめたるに由るもの多きが如し。而して其の占領後日本軍は此等の各地に皆な兵站司令部と守備隊を置き、また其中間の距離遠き所には守備隊出張所を設け、陸上には野戰電信を架設し、且つ野戰郵便をも通じ、河上には斷へず御用船を上下し、毎船に二人の衛兵を乗せて萬一に備へしむ。馬頭は戸數六百戸、卑低中の高地にして、四方を展望するに適す。河西務より此所に至る間には、馬



庄、大安平、安平、江米庄、童四庄等の村落ありて、沿道到る所穀菜を栽ゑ、曾て河岸の圃中を檢し、に胡瓜の長さ一尺五寸許にして夕顔かと怪しみしもの茄子の大さ兩掌を以て握るに餘り恰かも南瓜かと疑ひしもの等を見たり。總べて耕作の法は幼稚なるも地味は極めて肥え穀菜は肥料を施さずして蕃茂す。四千年の舊國にして其の耕耘法の幼稚なるは怪むべきが如きも畢竟土地闊くして人口未だ之に伴はざるに由るなるべし。故に聞く所によれば人民は皆な富裕なりといふ。馬頭より約三里にして張家灣なり。戸數また六百許、一路の巨鎮、水陸の要衝、雜穀蔬菜多く、人民また富裕なり。

通 州

通州は戸數四千、人口八萬、水陸の衝會にして北京に入るの咽喉たり。北方の運糧河は北京に通じ、東北は白河を控え、冬時氷結の期を除けば春夏秋の間は船舶常に輻輳し、岸に繫ぐもの平生五百餘隻と云ふ。帆檣林

立し去來して間斷無く、市街の熱鬧天津に次ぐ。此地周代に幽州に屬し、秦の時漁陽郡に屬し、漢の時潞縣と稱す。然ども元以前には城壁無ししに、明の洪武年間之を築く。當時城の周圍九里十三步、牆の高さ三丈五尺、城壁は四方に門を設けて、其の東を通運門、西は朝天門、南は迎薰門、北は凝翠門と稱し、各門樓ありしが、清の康熙九年舊城を改築して周圍一千六百二十六丈五尺、外に新城を築きて周圍一千二百六十三丈と定め、城壁は其基脚に於て寬さ三丈四尺、頂に於て二丈三尺に經營したりといふ。而して濠池は明の萬曆二十二年初めて掘開し、ものとかや斯かる由緒ある舊城も、康熙以後は唯だ壊敗に任せて毫も修理を加へざりしかば、今は内壁の過半は陥没して舊形を留めず、四個の門樓もまた皆な舊形を存せず、僅に角櫓の半は傾倒して聳ゆるのみ。城内の平面圖は凸字形を爲し、南北に狭く、東西に長く、大街二條交叉して凸形を作り、其の街路の十字を爲す所に鼓樓あり、鼓樓の北に奎星樓あり、南に蒞王廟あり。



り、また禮拜寺あり、是れ回々教の寺院にて規模甚だ宏壯なり。此地由來回教徒多し、奎星樓の北に粥廠あり、粥廠は近く北門に接し、燃燈舍利佛塔に隣る、舍利佛塔は通州第一の壯觀にして、遠く三里を隔つる白河の下流より望むを得、高さは東京淺草の凌雲閣より高く、其規模また遙に大なり、寶塔十三級、其下を蓮花臺と爲す。後周の宇文氏の創建に係り、唐の貞觀中、元の至徳中、明の成化中及び清の康熙九年に之を修理し、其後康熙十八年大地震の爲に盡とく破れ、遂に通州の偉觀を失ひしに、僧照感なる者之を慨き、廣く淨財を募り、康熙三十年再び建立せしものといふ。爾後歳を経ること既に百五十餘、扉破れて人の之を修するもの無きも、尙ほ通州の最大壯觀たり。之を聞く通州に八景あり、古塔凌雲(即ち燃燈佛塔)長橋映月(八里橋)柳陰龍舟(黃船塢)波分鳳沼(通惠河)高臺叢樹(城西將臺)平野孤峯(孤山)二水合流(白河富河)萬舟駢集(自潞河驛至長店間)是なりとぞ。以て高塔の如何に土人に推賞せらるゝかを知るべし。余等

の舟にて白河を遡る時、天津より馬頭まで五日を費やし、舟行頗る倦む。翌日張家灣を過るや、舟子は忽ち「塔！塔！通州到了々々々」と叫ぶ。彼等は實に此塔を以て遙に通州の目標と爲すなり。斯かる般賑の市街も一朝聯合軍の進入するに及び、城内は空しく閉し、も守兵守らず、一彈丸を交へずして、日本軍先づ之を占領し、に他の列國兵の入るに及び、て剽掠四出之に次ぐに強姦虐殺放火を以てし、終に全市街の四分の三餘は盡く烏有と爲り、幸ひに兵燹を免かれし家にては、良家の夫人處女等の露佛兩國兵の爲に辱しめられ、愧ぢて自ら其身を庭中の水瓶に投じて死せしものゝみにても、其數五百七十餘人に上りしと云へば、如何に其の慘狀を極めしかを想見すべし。總じて通州の家屋は、太沽、天津、河西務等に比すれば、宏壯にして華麗なりしが、今は家と人とを合せて焦土に附し、また生艸を留めざらんとす。慘また慘なり。此地に南北兩米倉あり、毎年南方の貢米三百餘萬石を貯蓄すといふ。而して南は十棧北は



六棟、みな日本軍の占領に歸したり。  
 通州の西門外より北京の朝陽門まで約四里一路平坦にして幅五間許りの道路は一面に巨石を敷き詰め石の大き長六尺幅二尺厚一尺許の短冊形を爲し鐵楔を以て石と石とを接続せしめたる所多く土工の宏大は目を驚かす許りなるも、久しく修理を廢し石は往來の車輪馬蹄に磨損して所々陥没し凸凹轆轤車行最も艱む路の南方に運河あり通州より北京に向け、糧米漕運の幹流なり。通州より約一里にして八里橋あり。往年清國兵の英佛連合軍を防ぎし所橋は石造にて巾八間長三十間頗る堅固なり。通州八景中の所謂長橋映月は此所を謂ふなり。通州より北京朝陽門までの沿道村落は、揚家庄、菅家庄、三間房、定福庄、代王庄、太平庄等あり。村落には榆槐楊柳茂り、時に翠松を見る。

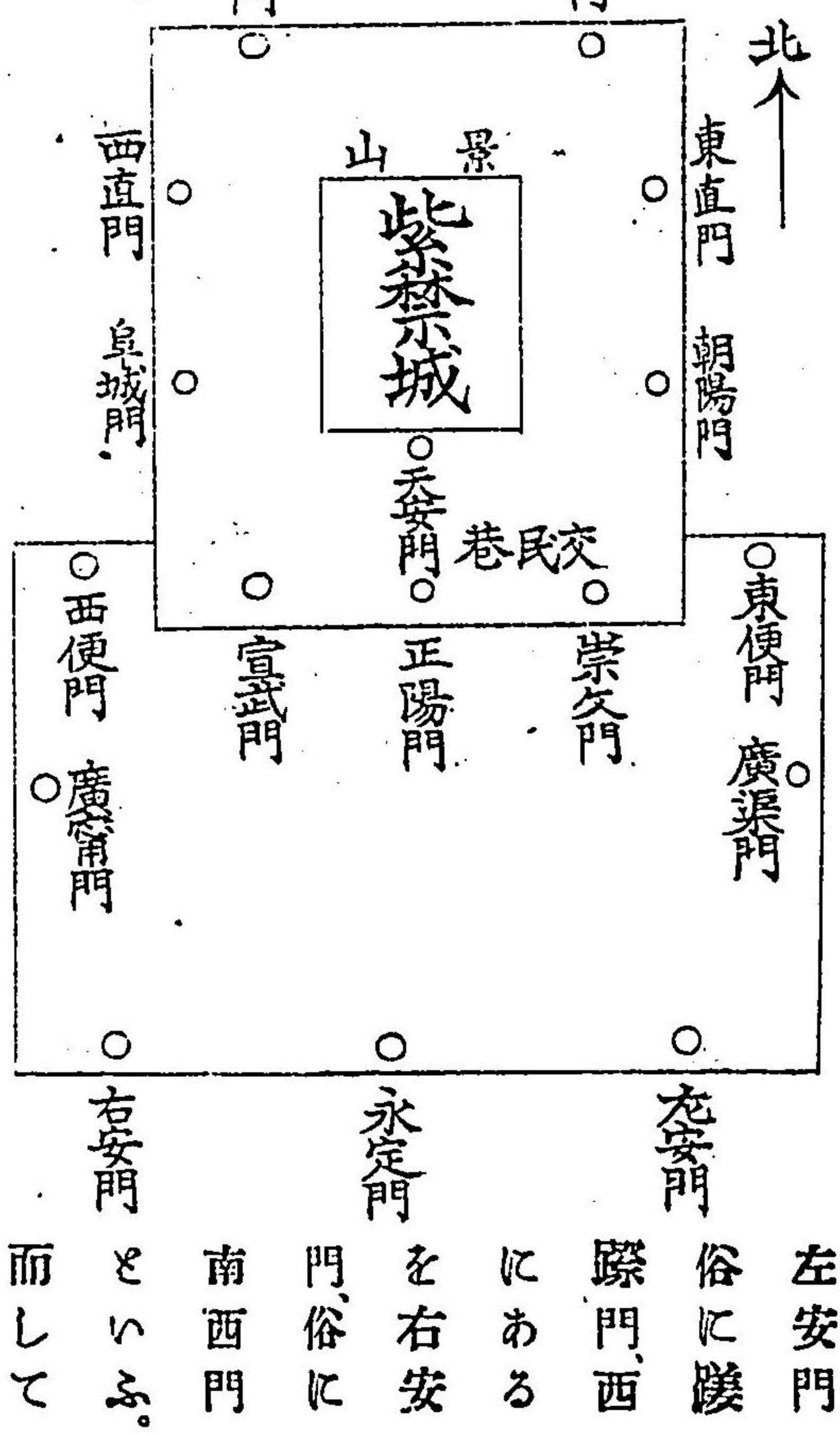
### 北 京 城

北京城は内城と外城の二個連接す。北方にあるは内城にして南方にあ

るは外城なり。皇城即ち紫禁城は内城中にありて滿人多く之に住し、八旗兵、諸官廳、總理衙門、各國公使館とも、其中にあり。外城には多く漢人住居し、商賈最も盛んなり。之を東京に例ふれば内城は丸の内と麴町赤坂邊の山の手の如く、外城は日本橋神田淺草等の下町の如し。内城は正方形にして各邊長さ約一萬六千尺東邊に二門あり、南にあるを朝陽門俗に齊化門と云ひ北にあるを東直門と云ふ。北邊に二門あり、東にあるを安定門、西にあるを得勝門と爲す。西邊また二門あり、北にあるを西直門、南にあるを阜成門と爲す。南邊には三門あり、中央にあるを正陽門、西にあるを宣武門、一に順治門、東にあるを宣武門、一に哈達門と爲す。而して正陽門は紫禁城の正門なるが故に一に前門と呼ぶ。城壁の高さ十間上部に於て幅八間胸壁の内、外及上部の三面は總て磚石を以て覆ふ。外城は長方形にして其の北邊は全く内城の南邊に接し、内城の隅角より東方及び西方に向け延長すること各三十五間許。東西の兩面は各一萬



尺許なり。其の南邊は北邊と同じく城壁の構造は内城に同じ然とも其の断面は内城の半に過ぎず。東西各邊に各一門あり東にあるを廣渠門俗に沙窩門と云ひ西にあるを廣安門俗に彰儀門といふ。南邊に三門あり中央にあつて得勝門を永定門東にあるを北邊には内外二城に交通する三門の外東西の隅角に各一門あり東を東便門西を西便門といふ各門の位地は圖の如し。



内外二城とも皆な水濠を繞らし其水は玉泉山昆明湖より來り西直門の西北隅に於て城濠に入り更に城濠を繞り東便門外大通橋の下流に於て合し、糧運河と爲り通州に至り白河に入る外壕の幅一定ならず、五間乃至二十間許なり。内城の中央は即ち皇城にして、磚石製の牆壁を繞らし城内には宮殿樓閣、縦横に連なる外城の永定門より正陽門を経て天安門より紫禁城内の乾清門まで一直線に通路を設け、正陽門と天安門の間に大清門、端門あり。紫禁城の後門を神武門と云ひ門を出れば背後は景山と稱し、北京全市を下瞰する丘陵にして、煤炭を以て築き上に多くの寺院、堂塔あり。各國公使館は正陽門と崇文門との内なる交民巷中にあり。肅親王府は其の北方に隣りす。今回各國公使館員の六十日に亘る籠城は實に此の交民巷と肅親王府にして、清兵は紫禁城及び朝陽、崇文、正陽の各門の四方より圍みしなり。また連合軍の北京に進入せしときは、日本軍は先づ



朝陽門と東直門とを破りて漸次に安定、得勝、西直の各門を占領し、今尙ほ現に此等の各門内を守備區と爲し、露國軍は東便門より先づ外城に入り、崇文門を破りて交民巷に達し、なり而して英の印度兵が水門を潜りて内城に入りし所は、崇文門と正陽門との中間にて、交民巷の間に玉河と名くる平時水なき渠の爲に城壁の下に設けたる水門なり。通州より北京に入るには、朝陽門は其の最要衝に當り、城兵は最も多く、此所を防禦し、かば、日本軍の苦戦は左こそと思ひやらる。若し天津より鐵道によりて北京に至るには、永定門に入るを順路と爲すなり。

茲に北京城の沿革を述べんに、城は直隸省順天府に屬し、順天府の地は上古帝顓頊の時には幽陵と曰ひ、帝堯の時には幽都と稱し、帝舜の時には幽州と呼び、夏商の代には冀州、周にはまた幽州、春秋戰國の時には燕國の境にして、秦の時には上谷、漁陽二郡の地たり。漢の初めに燕人の爲に涿郡を分置せしが、元鳳の初、孝昭の時、燕國と改めて廣陽郡とし、本治

の初、孝宣の時、更に廣陽國とす。東漢には廣陽を省きて上谷に入れしが、永平八年、明帝の時、復た廣陽郡を置けり。當時郡治は薊に在り、幽州もまた此に治す。魏晉の各朝皆之に因れり。三國の時、魏は燕郡とし、晋は燕國とす。愍帝の建興二年、石勒薊に入り、幽州都督王浚を執へ、故の尙書劉翰を以て幽州刺史を行はしむ。翰幽州を以て段匹磾に歸す。其後石勒に並せらる。燕主慕容儁曾て此に都し、其後符堅、慕容垂代る々々、其地を有す。後魏もまた燕郡とし、兼ねて總管府を幽州に立つ。隋の初、郡は廢し、も仍ほ幽州といひ、總管府を置きしが、煬帝大業の初に至り、府を廢して、改めて涿郡といふ。唐の初め、また幽州とし、初めに總管府を置き、次で大都督府と爲し、が、肅宗、天寶の初、改めて范陽郡と云ひ、范陽節度使此に治す。肅宗乾元の初、復た幽州と爲す。軍を盧龍と曰ひ、盧龍節度使の治たり。上元中、賊史朝義、史思明の子、改めて燕京と稱す。京と名けしは、此時を始めと爲す。後に強藩の幾たびか之に據り、唐の末には劉仁恭、大號を此に



僭し、後唐の代に幽州と云ひしが、晋主石敬瑭其臣趙瑩を遣はし、幽薊瀛、莫、涿、檀、順、嬭、儒、新、武、雲、應、朔、寰、蔚の十六州を以て遼に獻ず。時に遼の太宗（耶律德光）會同元年にして晋の天福二年なり。太宗乃ち詔し、幽州を以て南京幽都府といふ。是れ燕京の地の帝者の都となりし始なり。史によれば會同三年三月太宗南京に至り、鳳駕を備へて拱辰門より入り、元和殿に御して入閣の禮を行ひ、又昭慶殿に御して南京の郡臣と宴すと、因て惟ふに前代僭偽の主等既に此地を都城に擬し、宮殿の稱を設けしものゝ如く、太宗の入りしとき別に改築せず、此の年冬に至り始めて涼殿を建つ。當時の都城は現今の都城の西南に在り、内を皇城と爲す。都城の西南隅に在り、皇城内の宮門は宣教と曰ふ。城門五あり、南端、左掖、右掖、顯西、子北と名け、都城は方三十六里、清里高さ三丈、衡廣一丈五尺、八門あり、東を安東、迎春と曰ひ、南を開陽、丹鳳と曰ひ、西を顯西、清晋と曰ひ、北を通天、拱辰と云ふ。太宗の入りしは此の拱辰門なり。其後聖宗の統和二

十四年、南京宣教門を改めて元和門とし、左掖を萬春門とし、右掖を千齡門とす。開泰元年又南京幽都府を改めて燕京析津府とし、幽都縣を宛平縣と爲せり。其後宋の徽宗の宣和四年其地を得て改めて燕山府と爲し、其地金に得らるゝに及び、また燕京析津府と稱す。金の太祖太宗の時、は上京に都して燕京に至らざりしが、熙宗始めて盧彥倫に勅して燕京の宮室を營造せしめ、廢主亮（海陵王）に至り、都を燕に遷さんと欲し、天德三年詔して燕城を廣め、宮室を建つ。其の制は宋の汴京に依る。貞元元年來りて之に都し、燕京を改めて中都と爲し、府を大興と曰ふ。元の太宗十年に既に燕京を取りしも、未だ蹕を駐めず、世祖位に即くも尙ほ開平（即ち上都）に在り、中統二年始めて命じて燕京の舊城を修む。是れ金の宣宗汴に遷りしより、燕京は皆な亂兵の爲に焼かれ、中統元年車駕燕に來るも入るべき宮室無りしに由る。此に於て至元元年都を燕に定め、詔して燕京を改めて中都と爲し、府を大興と曰ひ、始めて宗廟宮室を建つ。四



年金の舊城北の東に於て改めて都城を築き、亦皇城を其中に建つ。八年中都、真定、順天、河間、平滌の民二萬八千人を發して宮城を築くの役に充つ。九年中都を改めて大都と爲す。而して大興府は仍ほ存す。十年始めて正殿、寢殿、香閣、周廡、兩翼室を建つ。十一年正月宮殿成を告ぐ。帝始めて正殿に御して朝賀を受く。二十年大都城を修む。二十一年始めて改めて大都と爲す。後ちに明の太祖は都を金陵に奠めて南京とし、汴京を北京とし、濠洲を中都とす。而して元の都城を廢し、其地を縮め、改めて北平府と爲し、布政使司を置く。後に成祖の燕に封ぜらるゝや、其の邸は元の故宮に因る。成祖永樂元年登極の後も故宮に於て朝を受く。此年二月北平を以て北京と爲し、留守及び行部官を設け、改めて順天府と爲す。現今の北京の稱は此時に始まる。五年始めて宮殿を營建す。七年元の故城を拓いて京城を築く。十四年北京營建の事を以て郡臣に下して會議せしむ。郡臣議して奏すらく、北京は聖上龍輿の地、北の方居庸に枕し、西には太行

峙ち、東は山海に連り、南中原に俯す、山川の形勝以て四夷を控へ、天下を制するに足る。誠に帝王の都なり。此年車駕巡狩し、四海會同し、人心協和し、漕運日に廣まり、商賈輻輳し、財貨充盈し、良木巨材已に京都に集まり、天下民衆事に趨くを樂む、伏して乞ふ、上は天心に順ひ、下は民望に従ひ、早く所司に勅し、王を興して營建し、以て子孫萬世の計を爲さ給はば、天下幸甚と。十五年十二月に至り改めて皇城を東に築く。永樂十八年九月北京宮殿始めて成る。十九年正月帝奉天殿に御して朝賀を受け、大赦す。宮城を紫禁城といふ。周六里十六步、宮城の外を皇城と爲し、周十八里、南を大明門と云ひ、長安左右門と云ひ、東西を東安門西安門と云ひ、北を北安門といふ。京城周圍四十里、九門と爲す。南を麗正門といふ。後に英宗正統の初改めて正陽門と曰ふ。南の左を文明門といふ。後に崇文門と改む。右を順成門といふ。後に宣武門と改む。東の南を齊化門といふ。後に朝陽門と改む。東の北を東直門と曰ふ。西の南を平則門といひ、後に阜城門と改



む。西の北を西直門と云ふ。北の東を安定門、北の西を德勝門と名く。世宗嘉靖三十二年重城を築て京城の南面を包み、東西に角樓を施す。現今の外城此れなり。此に至りて北京の規模大に定まる。清朝明に代るの後も、また此に都し、多く變更する所なきなり。皇城四面の城門其の東西は明の舊名を襲ひ、唯だ南を天安門と改め、北を地安門と改めしのみ。金の梁襄は此地の形勝を論じて曰く、燕都は地雄要に據り、北山險に依り、南通處を壓し、堂奥に坐して庭宇を俯視するが如きなり。又居庸古北松亭の諸關東西千里、險峻相連り、近く都圻に在り、據守尤も易しと。然れとも今は列國聯合軍の攻るに及び、二日を支ふる能はずして、天子遠く遁る。畢竟地の要害も人を得ざれば其の用を爲さざるなり。

天津保定府間

今より更に轉じて天津より保定府に到る線路に就て説くべし。是れ保定府攻環の爲に聯合軍の一部が進みし線路なればなり。然れども其の

攻環には日本軍は加はらず、また一戦も無りしかば、詳記するに由無し。天津の西門を出で、凡そ四里、其間運河を渡り、楊柳青鎮に達す。楊柳青鎮は運河と子牙河との間に在る一巨鎮にて、商業繁盛なり。戸數二千餘。此所より半里にして子牙河あり、幅二十間、深さ約一丈、附近に三角淀の湖あり、四方に開鑿して舟楫を通す。楊柳青鎮より約四里半、堤上を行けば、楊芬港あり、戸數三百。更に五里にして勝滂港あり、戸數三千許。大滂老河と大清新河との會合點にして、南は文安縣に、西は保定縣に、西北は薊州に至る。水陸交通の衝に當り、商業甚だ盛んなり。また四里にして蘇家橋に達す。戸數約三千五百。また三里にして薊州には長方形の城あり。薊州より八里にして雄縣と爲す。方形の城廓あり、東西七百米、突、南北三百米、突、牆壁高さ六七米、突、東北西の三門あり。此地には縣廳、千總署等あり。戸數一千五百あるも、概ね農民のみ。雄縣より六里半にして容城縣は、また戸數一千許の小都會なり。之より安肅縣までは五里にして、南北の二路



あり、安肅縣より保定府までは約七里、其の沿道の事は次に保定府北京間の紀事に記す可ければ略す、天津保定府間通じて約四十里といふ。

### 保定府

保定府は北京より平時鐵道の通ずる所其地は北京を距ること約四十六里半、直隸總督の駐在所にして、總督は一年の中一半は保定、一半は天津に住するなり、其地の戸數二万、人家稠密にして北京若くは天津より山西に通ずる旅客貨物の必ず經由する所、商業甚だ盛んなり、城廓は方形にして周圍約一里半、四壁は皆な支那流の大煉瓦にて、高さ五間、四面に各一門を開き、各門に向つて城内の市街は縱横に通じ、官衙と官吏の住宅とは皆な市街の間に在り、市内には七十二の大胡同ありといふ、胡同とは總て横街の謂なり、城南に流るる唐河は、河南の五臺縣より來り、上西河と爲り、此地を経て天津に至る、故に舟楫の便あり、川幅は保定にて五間深さ、平時五尺許なり、城濠の水もまた河流に通ず、附近の土地は概ね肥沃にして、耕作能く拓け、土民また富む、故に保定府は水陸交通の衝に當りて、行商輻輳し、東は天津に通じ、北は北京に達し、實に京畿の咽喉たり、聯合軍の此地を攻むるや、一軍は北京より、一軍は天津より進めり。

### 保定府より北京の間

保定府と北京との間も、聯合軍の一部が保定府攻撃の爲に進みし所、而して保定北京間は鐵道ありて、保定の方より安肅縣、固城鎮、定興縣、涿州、瑠璃河鎮、良鄉、板橋城(盧溝橋)を経て北京に通ずるも、當時義和團匪の爲に鐵道は盡く破壊せられたれば、是に由る能はざりき、故に略ぼ其の道路に就て説かんに、保定府より安肅縣の間は約七里にして、安肅には戸數約二千、其間の道路は北京街道とて、幅十間許にして、沿道には韓家庄、徐家橋、蘆家祠、石頭店、曹河鎮、經堂庄、半壁居、劉詳店、十里鋪、何家庄などの村落あり、安肅には城廓あり、城内には官衙兩院、寺院學校等ありて、市街



般賑の地なり。城廓は周圍一里餘、二門あり、城南には常流河流れ、城北には鷄爪河流る。

安肅縣より小神庵、白塔堡、麒麟店、田村鋪、六里屯等を経約四里にして固城鎮と爲す。戶數一千、土民富裕にして南北兩端に牌門あり。固城鎮より更に約五里、六里屯、上級鋪、十五級、三里鋪、泥瓦鋪、北河店頭を過れば、定興縣なり。方五百米突の城廓あり。西に涿水あり、義和團の始めて蜂起したる所なり。定興縣より九里にして涿州と爲す。戶數二千、此地は山西、河南、山東三省の要衝に當り、北方に拒馬河流れ、城廓あり、南北約半里餘、東西半里餘、城壁の高さ約五間、四門あり。城内の中央鼓樓あり、東隅に高塔聳ゆ。城の四方は平坦にして、僅に西北隅に小高原あるのみ。

涿州より下胡良、胡良を過ぎ、長さ五十間餘の石橋を渡り、更に山家庄、上胡良、先鋒坡、長庄、東仙坡、歇河村を経て琉璃河鎮に達す。是れ琉璃河の南岸にある巨鎮にして、戶數八百、水運の便を占め、百貨輻輳す。琉璃河は西方より東に流れ、河幅約百間、深さ約十二三尺、河床は砂にして、舟楫は天津、保定、白溝に通ず。此地一大石橋を架す、長さ百間餘、幅四間、頗る壯觀なり。

琉璃河鎮より琉璃店、豆店、最恩寺、王府店、七里店、小十里村、大十里村、郡家庄、魯村を過ぎ、其間約四里半にして、良郷に達す。良郷は戶數一千、人口五千、此地もまた山西、河南、山東各省の要衝にして、商業甚だ盛んなり。縣城は東西約四百米突、南北約七百米突にして、民家は多く城内にあり。良郷より三里にして、拱極城に達す。其間に吳店村、長楊村、君留庄、籬巴房村、崗窪村、二郎庄、招辛店、長新鎮の諸村あり。永定河は拱極城の南門外、凡そ百間許の邊に流れ、河幅は凡八十間、一大石橋を架す。之を蘆溝橋と爲す。橋の幅四間、長さ百二十間、建築壯麗にして、且つ堅固なり。北京漢口間の大鐵道を蘆漢鐵道と稱するは、此の蘆溝橋より起るを以てなり。而して其の鐵道は、現時保定府まで開通せるなり。拱極城は、北京西南の一巨



鎮にて、また山西、河南、山東の要衝たり。城廓は方形にて、周圍約八百米、四方に濠を回らし、東西に門を開き、墻壁の高さ約四間、此所より大井見、小井見の二村を過ぎ、約四里にして北京に達す。

天津北京間の瀛車

既に天津より白河に由りて楊村通州より北京に通ずる線路と、更に天津より保定を経て北京に通ずる線路とを説きたれば、今はまた天津より北京に通ずる鐵道線路に就て略説すべし。即ち天津より北京城外の馬家堡まで、停車場は天津、北倉、楊村、落岱、郎坊、南定、黃村、豐臺、及び馬家堡の九にて、其の全線の延長七十九哩、六十八鎖の複線なり。此の鐵道は、今回の事變に盡とく義和團匪の爲に破壊せられしも、天津楊村間は露西亞軍之を修繕し、楊村郎坊間は獨逸軍、郎坊、豐臺間は日本軍、豐臺、馬家堡間は英吉利軍之を修繕し、今は既に全線全く舊に復して、瀛車は日之走行することゝ爲れり。余は天津以北の鐵道に乗りしこと無りしも、親し

く乗れる人に就て聞きし所により、其の梗概を記すべし。

天津停車場は紫竹林の居留地とは白河を隔て、其の對岸にあり、停車場と居留地との間には舟橋を架し、停車場の前面なる河岸は、約十町許の間、一帶に食鹽を堆積して、丘陵の如し。停車場は事變の初より久しく日露英等の各國軍が清兵の爲に襲撃せられ、殊に白河の上流なる水師營の砲臺より清兵の發射する大砲は、照準正しく命中し、聯合軍をして防守に最も苦戦せしめたる所なり。瀛車は此所を發して白河の左岸を走り、北倉を過ぎ、楊村に至りて白河の鐵橋を渡り、落岱驛に達する頃、始めて東北遙に連山を望むべし。總て此邊は一帶に直隸の大原野、太浩上陸以後三四十里を行くも、眼界一青皞の目を遮ざるもの無く、此に至て始めて遠山を有無縹緲の間に望む。落岱の次なる驛を郎坊と爲す。天津北京間の中間驛なり。天津より此所まで鐵道の左右は概ね畑にて、最も多く高粱を種る時、桃杏を植る所もあれど、樹木甚だ稀なり。郎坊以北



は柳樹漸く多く、高粱稀にして蘆葦の相連るを見る。既にして安定驛を過ぐれば、北京郊外なる西山は漸く近く、黄村驛を経て豊臺に達すれば、鐵道は西北に分岐し、西なるは其の次の蘆溝橋(拱極城)驛に連りて、蘆漢鐵道に接続し、保定府に通ず。北なるは更に北京城外の馬家堡驛に達するなり。其間總て平坦なれば、一も隧道なく、大なる橋は楊村の鐵橋あるのみ。全線の勾配は百分一に上らず。工事は困難ならざるが如きも、木材の少き爲に其の枕木は日本より輸入するほどなれば、木材は節し得る。丈け節約し、石を以て之れに代へ、哩表と云ひ、傾斜標の如き、皆な石を用ふ。

馬家堡は北京城永定門外一哩半の地にあり、馬家堡永定門間には電車鐵道あり。また平時には此間に馬車多し。馬車の制は、日本の大八車の如きもの、上に薄錘形の幌を蔽ふて、客は其中に踞し、御者は轅に倚りて馬を驅るなり。車に彈條の裝置なく、道路に高低凸凹多く、傾斜軼軻するこ

とに全身震動し、苦痛甚だし。永定門を入れれば天壇と先農壇を左右にし、正陽門までは一直線の正陽門大街にて、平時は商業の最も繁盛なる所といふ。(正陽門内の事は北京城の下に説きたれば贅せず)

### 北塘及蘆臺

天津より塘沽を経て山海關までの鐵道の事を説く前に此の線路中會て露獨佛の三國軍が攻めて取りたる北塘と蘆臺とに就て略説すべし。太活に上陸し、十三町半にして塘沽に至り、又一里にして新河村に至る。此所は戸數三百、居民多くは製鹽を業とし、兵營あり、方形にして各邊約六十間、土塙を繞らし、高さ一丈許、新河より東北に三里四町半にして北塘と爲す。

北塘は蘆運河の河口に臨み、戸數五千、富家多く、海門の防禦には三個の砲臺あり。一は河北、一は河南、一は市街の東南海岸に在り。中央の砲臺は方形にして、方二百間、皆な土壘閉鎖堡にて、内に兵舎と官房とあり。市街



の北端に北塘河あり即ち蘆運河の河口にして河幅約八十間船舶は二  
 桅又は三桅にして容積四五十石のもの多く又五六百石積の海舶も少  
 なからず舟楫の利は北は蘆臺豐臺薊州に通じ西は天津に通ず地勢は  
 東方海に瀕し北は大河を擁し西南は曠豁にして田疇相連なり百貨集  
 散の要衝に當るが故に市街繁華にして商業盛んなり往年英佛聯合軍  
 の北清を攻めしとき此所より上陸せり故に爾來清國は常に守兵を此  
 所に置きて警備を嚴にす去れば九月十九日より二十日に亘り露西亞  
 佛蘭西及獨逸軍が此所を攻めしとき既に天津北京陷落の後ながら尙  
 ほ激戦一晝夜を費やしといふ。

北塘より北に向ひ北塘河を渡り築堆の官道を過ること四里十三丁餘  
 にして營城村に至る戸數五十此附近には製鹽場最も多し更に約一里  
 にして韓沽あり戸數五百餘また二里九丁にして蘆臺に達す北塘河の  
 沿岸には鹽業者多く韓沽蘆臺間は耕作盛んなり。

蘆臺は蘆臺河を背にして東南は曠野に面し中央の一街長さ十町許三  
 樓門あり左右の小路また石門ありて以て一廓を爲す南西約半里南北  
 約四五町周圍に土牆を繞らし三個の舊式なる砲臺あり蘆臺司署提督  
 衙門等あり此地は曾て袁世凱の鍊軍を置きし所にて事變の前は轟士  
 成提督と爲り三十營の歩騎砲兵を置けり。

市街の戸數は約一万余邊には船舶常に輻輳す其船に五様あり即ち二  
 桅或は三桅容積四五十石の帆船百餘隻人を載する積二三十隻十二三  
 石積の小舟四五十隻また二舟相接して用うる輕舟最も多し百貨厩集  
 商賈殷賑北清屈指の重鎮たり露獨佛各國の兵の既に北塘を陥れ進  
 んで此地に迫るや清兵また防守し此所にも一日の激戦を費やしとい  
 ふ而して北塘及蘆臺の攻撃は清兵の毫も戰意なきに關せず強て迫  
 つて挑激せるものなるが故に日本軍を首とし英米諸國軍は之に加は  
 らざりしといふ。



### 塘沽山海關間の鐵道

天津停車場を東に發し、軍糧城、新城の二驛を過れば、二十七哩にして塘沽に達す。塘沽以北山海關までの瀛車は、塘沽にて乗り替へる故、其線を一に山海關鐵道とも云ふ。事變の當所は楊村より天津塘沽を経て山海關までの全線路を露西亞軍にて管理し、後、後に聯合軍司令官の手に收めて、然る後之を英國の管理に歸せり。而して天津塘沽間の事は前に既に説きたれば、今は塘沽山海關間鐵道の沿道に就て略説すべし。

塘沽より山海關までの間には、北塘、韓沽、蘆臺、唐坊、胥各莊、唐山、開平、古冶、雷庄、灤州、石門、安山、昌黎、留守營、北戴河、湯河の諸驛を経て山海關に達す。其間の里程は百四十七哩なり。塘沽、北塘、蘆臺の事も既に前に説きたれば、贅せず。北塘以東は海岸と遠かり、唐山は開平鐵山より石炭を輸出するの要地にして、市街稍や盛んなり。開平は戸數三千、開平石炭の産地として聞ゆるも、石炭を輸出せず、却て胥各莊、古冶には石炭を山堆す。胥各

莊にはまた運河あり。塘沽より舟楫の便を得。灤州は戸數五千、灤河の岸にありて、方形の灤州城あり。左方には偏涼汀と名くる好風景の村落あり。黎昌は戸數五千、城廓あり。各面長さ三十五間、四門あり。城内に一高塔あり。東門外に人家最も多し。多く葡萄、梨子等を産す。北戴河に至れば線の南方に海を望む。此邊は海水清くして、海岸には白砂青松相映じ。北清には稀に見るの好風景なり。故に天津在留の外國人は、年々多く暑を此に避くといふ。前年新たに開港場となれる秦皇島は此より近き海岸にあり。島と稱するも島にはあらず。次に湯河驛を経て山海關に達す。

### 山海關

山海關は本名を渝關、又は臨渝關と云ひ、臨渝縣城の東門に當れり。周圍約六丁、山を負ひ海に臨み、所謂方里の長城の起點にして、東西南北の四門を建て、東門は即ち山海關に入るの門にて、天下第一關と書す。長城の一端は遠く海中に入り、一方は高く山頂に連なる。市街は城壁内に在り。



戸數約一万、北京奉天間の往來には必ず通過する唯一の關門なり。海岸長城の南面に三砲臺あり、定遠、鎮遠、靖遠と名く、平時正定鎮軍歩兵四營之を守る。海岸船舶の繫泊に不便なるも、冬期太沽の結氷する後は、汽船を出入する所は唯だ此地あるのみ。故に聯合軍は、冬中陸海軍聯絡の根據地として、是非とも山海關占領の必要を認め、九月二十九日英國軍艦を以て其地の引渡を求め、若し拒むときは各國軍艦を以て攻撃する決心なりしに、清兵は穩かに引渡を諾したれば、今は日露英獨等各國の陸軍を分派し、其の城内を區劃して守備すること、天津北京に於るが如し。而して其の海岸に適當の港灣無き故、海中へ遠く棧橋を築き、汽船を其所に着け、陸上との交通を接續し、陸には、瀛車の既に二日を費さずして北京まで通ずるありて、北京東京間の通信にも、冬季結氷中に於て、十二日にして達するを得たり。

山海關より錦州を経て牛莊に達する關外鐵道も、今は既に工を竣り、露

### 西安の新首都

國軍之を管理す。故に平和回復の後、露西亞の滿州鐵道と連り、頓がて一方は旅順大連灣、一方は遼陽奉天にも接續すること、遠からざるべし。

今本編を終らんとするに臨み、清帝の蒙塵せる西安府に關して一言を費やすべし。西安は方今陝西省に屬し、西安府と稱するも、上古は長安と稱し、秦の始皇が此に都し、は實に今より二千二百年前にあり。其地は古の秦にして、東は函谷關の險あり、西に棧道の要害あり。葱嶺の山脈は其北に連り、秦嶺の諸山は其南を扼す。黄河其東を流れ、渭水其中を貫ぬき、沃野遠く其間に開け、以て帝者の都するに適す。故に秦漢隋唐の歷朝、皆な此所に都せり。中世以降久しく荒廢に歸し、今尙ほ長安縣を置き、城廓は東西一里八丁、南北三十二町、城壁の高さ十間、壁上五十間、毎に小望樓あり。城門は四にして、長樂、安遠、永寧、安定と名け、門は内外二重にして、門樓また甚だ壯大なり。登りて眸を放てば、平地千里、たゞ南方遙に



終南山を見るのみといふ。城外には濠を繞らし、濠の寛さ七八間、深くして徒渉すべからず。市街は城内に在て、人口五千許、往昔の繁華なしと雖も、商賈甚だ盛んなり。

更に清帝の北京を遁れて西安に播遷し、順路を見るに、八月十五日聯合軍の北京に進入するに及び、匆皇宮城を出て、皇后、西太后と共に、懷來縣、河城、雞鳴驛を経て、二十一日宣化府に着し、此に驛を駐むること三日、また發し、二十五日には山西省の大同府に着し、終に大原府に着し、は九月十日頃にて、其地の駐蹕二十日許にして、更に聯合軍の追隨せんことを恐れ、十月一日(清曆閏八月八日)を以て西安府行幸の上諭を發しぬ。此れより後は、大原府より徐溝、祁縣、平遙縣、介林縣、兩波、靈石縣、韓侯嶺、仁義驛、霍州、趙城縣、洪洞縣、平陽府、史村、侯馬、東鎮、聞喜縣、水頭縣、柏相鎮、牛渡鎮、樊橋鎮、蒲州府、風陵渡、潼關、華蔭縣、華州、渭南縣、臨潼縣を経て、西安府に到着したるもの、如く、其の時日は詳かならざるも、清曆閏八月十四日

に趙城を發し、同二十六日潼關に着蹕し、は明かにて、潼關は陝西省に屬し、西安府を距ること二百六十清里(約四十三里)に過ぎざれば、清曆の九月初旬(十一月中旬)には、西安に着蹕せられしなるべし。長安の故都再び車駕を迎ふるも、土民は枯木花を開くの喜び無く、北京の皇城は荆棘日に茂りて人の之を修むる無し。老大國の末路真に憫むべきなり。



附錄終



明治三十四年五月廿四日印刷  
明治三十四年五月廿四日發行

定價金四十錢

著者

坪谷善四郎

發行者

大橋省吾

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷  
加賀町一丁目十二番地  
佐久間衡治

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷  
加賀町一丁目十二番地  
株式會社秀英舎第一工場



發發  
兌兌  
元元  
捌捌

東京市神田區仲猿樂町十六  
東京市日本橋區本町三丁目  
東京東京堂 大阪 盛文館 名古屋 川瀬代助  
博文堂 文武館



# 世界冒險譚

毎月壹回發兌每編讀切洋裝頗美本

（正價一冊金三拾錢郵稅一冊六錢）  
 今や我邦、内外頗る多事なるに際して、國民の最も要する處のものは、冒險的精神なるは論を俟たず。而して之を鼓舞すること、先づ冒險譚、旅行記の類を以て少年子弟を教養するに始まる。歐米雄邦の教育家、夙に之れを勤む。然るに我邦に於ては方今此種の書籍甚だ缺乏せるは、甚だ遺憾とすべし。弊堂爰に見る所あり、**初航海**を譯述して、博したる櫻井鷗村君に請ひ、歐米少年社會に愛讀せらるゝ海事、軍事、實業等に關する各種の勇壯活潑なる少年冒險譚を譯述し、また時に自著を交へて、毎月一回之を發行せんとす、各冊出る毎に少年は素より大人と雖も必ず三誦、快絶を叫破せん。左に目次を示す。

- （櫻井鷗村君譯補）
- 既刊
- 第一編 金堀少年 全一冊
  - 第二編 遠征奇談 全一冊
  - 第三編 二勇少年 全一冊
  - 第四編 續遠征奇談 全一冊
  - 第五編 決志少年 全一冊
  - 第六編 漂流少年 全一冊
  - 第七編 殖民少年 全一冊
  - 第八編 航海少年 全一冊

# 世界冒險譚既刊

第一編 金堀少年 全一冊  
 第二編 遠征奇談 全一冊  
 第三編 二勇少年 全一冊

金堀少年は陸上の冒險譚である。金堀少年は少年の一團隊が險を冒し難を衝いて砂金採取に出掛け、金堀少年は數十年前米國大陸を旅行する時の困難な状態を勇ましく述べたもの。金堀少年は北海道枝幸の砂金採りの評判が高き今日是非讀んで見るべきものだ。金堀少年は讀む者には非常に面白く可笑しく讀まぬ者にはチツトモ面白く無い。金堀少年を讀んで一番眞似をやらうかなど騒ぎ出さぬやう斷つて置く。

海國民の最たる英國の二少年が商船ソリトン號に投じて世界巡航の途に上り、或は亞非利加或は亞米利加の原野に洋上に海島に歴遊して暴風巨浪を凌ぎ、猛獸を斃し、野火に苦しめられ、山賊と戦ひ、海賊を救ふ等、愉快、活潑、悲壯、勇烈以て少年子弟の志氣を興奮躍起せしむる大々の冒險譚を此遠征奇談とす。

これにこれ二百餘年の其昔、愛蘭土と英吉利とが烈しき戦争を交へた際、敵と味方との中に一人宛の勇少年があつて、二人は元々敵同士の家を生れたものであるのに、妙な縁から親友の義を結び戦耐なる其間にも、互に助けつ助けられ、死中に義勇に充ちたる精神を以てあらゆる危険を冒して、萬らに雄々しく且つ美しい物語で、戦争冒險譚の最も愉快なるものだ。



# 世界冒險譚既刊

編四第 續遠征奇談 冊壹全  
 編五第 決志少年 冊壹全  
 編六第 漂流少年 冊壹全

遠征奇談の愉快絶奇絶壯なるとは讀者の既に知る所、而して此續編に入りては、彼ツリトン號の二少年が太平洋の航海に於て或は熊狩の難あり或は海賊の虜となり、珊瑚島に漂流し、鯨捕りとなり、また人喰蠻族と戦ふ等、あらゆる危険を冒して、遂に目出度く世界一週の大航海を了けるの奇譚壯話あり、悉く腕鳴り血湧くの慨あらしむる者とす。

剛膽勇邁なる田舎少年あり、志を決して大都會に出で、奇策を施して敵を窮迫し、或は猛獅を縛して少女の難を救ひ、競走また射撃にて功名を博し、且つ生命を賭して屢ば敵を助け己もまた義侠の味方を得て、遂に亡父の仇を報じ、屢に奪はれたる家産を復して立志的大冒險を成就したる奇談は、今決志少年の雄編として世に公にせらる。

歸省途中の二少年學生が圖らざる船火事に逢ふて辛ふじて生命を拾ひ、荒野に漂着してから、徒步故郷に急ぐ其間、屢ば蠻人に苦しめられ、また恩をかけた一人の土蕃に助けられ、猛獸の難にかゝり、途に迷ひたるなど種々雑多の冒險の末、やうやく父母と相見ることを得た壯快な譚はこれなるぞ。

# 文武堂藏版

## 東西二十傑

目次	全冊冊補珍上製正價金卅五錢郵稅六錢 (三版)
●源為朝	桂月 ●ワシントン
●ハンニバル	天溪 ●木戸孝允
●秦始皇	鯉洋 ●鐵木真
●シーザー	空花 ●チルソン
●山田長政	鳥城 ●新田義貞
●コロンブス	天溪 ●北條早雲
●項羽	質軒 ●唐太宗
●加藤清正	秋香 ●ガルバルツ
●ヘートル大帝	華水 ●李鴻章
●大石良雄	背軒 ●モルトケ將軍
●フリードリヒ大王	成友 ●木村重成
●鄭成功	露伴 ●シャヤンダー

不染 水哉 紫山 左川 蘭雪 麗水 綱密 春汀 柏軒 松村介石 石川安次郎君  
 小波 霞城 島田三郎君 三宅雄次郎君  
 小波 霞城 島田三郎君 中四牛郎君 合  
 川崎三郎君 高山林次郎君  
 (再版)

## 近世世界十偉人

亂極まりて英雄を生じ、時非常にして非常の材乃ち見ゆ。茲に近世の十大國に就て各々その十偉人を撰ぶ。時世を代表し、尤々國家に貢獻せる所の十偉人を撰ぶ。各國一人を傳ふと雖、亦其當時天下の大勢を看取するに餘あらん。稀世の珍書と云可。

全冊冊補珍 正價金五拾錢 郵稅八錢



版 藏 堂 武 文

讀者新聞新賣讀  
編君郎次光木鈴

譚美秀閨治明

版七第

全壹冊袖珍美本賣價金拾錢郵稅二錢  
浸潤受の力は驚く可きものあり  
て存す古來哲人傑士の、其母より受  
り化の大人なるは、史傳之を示して炳焉  
の國に裨補する所誠の測る可らざる  
あり。實に社會の龜鑑たり。



文學士高田早苗君序文 破天荒齋松平康國君序文  
如不及齋市島謙吉君序文 讀賣新聞記者鈴木君編纂

訂正明治豪傑譚

孤劍世海の幾波瀾を凌倒し風雲を呼び雷霆を呵し能く驚  
天動地の偉業を立つ是れ維新前後の英傑の士が國事に  
躬して偉大の革命を遂げりし所以なり其間傑士の性行  
歴尋常ならざるもの多し其奇談異蹟彌よ出で彌よ多  
く殆ど無限の趣味あり今之を網羅して更上の潤飾を加へ  
明麗の好冊として親炙するが如く、世に君子一たび  
緋然たる身傑士の音容に親炙するが如く、世に君子一たび  
陶然たる所あるべし。

全壹冊洋裝袖珍  
賣價金貳拾五錢  
郵稅四錢

版 藏 堂 武 文

英國海軍大尉エム、リード氏原著  
日本櫻井鷗村君譯 中村不折君口繪

青少年 初航海

(一) 家を出づ (二) 船中の苦 (三) ベン、ブレイス (四) 橋上  
の亂打 (五) 海中に落 (六) 水夫の修業 (七) 奴隷貿易船  
(八) 脱船の密議 (九) 英國巡洋艦 (十) 黒人の王様 (十一) 和  
蘭の最後 (十二) 獵に赴く (十三) 獅子と戦ふ (十四) 荒野に  
迷ふ (十五) 人間の干物 (十六) 獅々の襲來 (十七) 奴隷の積  
込 (十八) 王の懇望 (十九) 鰐魚の難 (二十) 軍艦の來攻 (廿  
一) 飲水の缺乏 (廿二) 船火事 (廿三) 火藥の在處 (廿四) 奴  
隷解散 (廿五) 四面の大敵 (廿六) 洋中に漂ふ (廿七) 慘殺の  
言渡 (廿八) 危機一髪 以上

六版

全一冊袖珍美本  
總シロース金字入  
正價金廿五錢  
郵稅四錢

松林伯圓君講演  
武内桂舟君挿畫  
(再版)



御前名譽講談

中山大納言

寛政年間、太上尊號の事、公武の間に軋轢を生  
じ、爲に議奏中山大納言關東に下向し、老中  
松平越中守と殿中に對見し、談論數回屢々幕  
吏を震慄せしめたる快絶史談は、世に隠れな  
き偉蹟也。今松林伯圓君の雄辯を揮ふて之  
を講演す。御前名譽講談、中山大納言、御前  
御局、御前、御尊、御聽、召され中山二位  
の御局、御前、御尊、御聽、召され中山二位  
全壹冊袖珍美本正價金廿五錢郵稅四錢

七







版 藏 堂 武 文

本美入字文金製上珍袖

巖谷蓮山人 共  
川田河山人 譯  
黑田湖山人

〔寫真大版口繪〕  
中村不折君畫

〔版 再〕

少年 乞食王子

冊壹全

正價金三拾五錢 郵稅六錢

王子に肖し乞食小僧、乞食小僧に肖し王子、相繫がりて變幻不可思議物語を成す是れ米國の滑稽家マク、トインソンの原作を譯せしものにして誠け奇々妙々の快文字、讀むて厭くを知らざるべし



山陰麒麟

附 文 覺 上 人 橋 養 錄

即ち文覺袈裟の物語合して三百五十餘頁の附録橋養の語、居士近來漸く志を脚本を得ざるまゝ昔取りたるきねづか稗史家と出かけたまへる(中略)閑話休題、相變らナアツケ書きにもすら(中略)としく近來の好書なり

全壹冊袖珍美本總クローヌ  
正價金貳拾五錢郵稅四錢



福地櫻癡先生作  
水野年方君口繪  
帝成文學評  
山陰麒麟と主人公  
山中鹿之助の漢譯  
にて即ち尼子末路

版 藏 堂 武 文

中島湘煙女史序  
三宅花圃女史歌  
中村不折君畫  
津田梅子女史序  
巖本善治君跋  
櫻井鷗村君著

(再版)

代現

とんな氣質

全壹冊袖珍美本  
正價金三十五錢  
郵稅六錢

多大の魔力を有し知り易きが如くにして而も大に覺り難きものは女性なり。本書はこれ特殊の眼光を以て婦情及家政の微を穿ち幽を極めんとするもの優に當代の異彩文字たり。女流は之を見て首肯する處あるべく、男性は以て大に學ぶ處あるべし



文學士高山林次郎君序  
西村眞次君著

美文創作

韻文要訣

全壹冊洋裝美本  
正價金廿五錢  
郵稅四錢

本書は青年文學に志すもの爲に著したるものにして、綱を總論、美文の作法、韻文の作法、結論に分ち、美文并に韻文を創作するの要訣を既示せり殊に詩の解釋、小説紀行文等の説明韻文の創作法等は、著者が古今の學說を咀嚼して新たに案出したるもの、之を讀まんものは、單に文章の作法を知るに止らずして文學の一斑を解するを得可し江湖の青年願はくば一本を購ふて座右に備へよ





版 藏 堂 武 文

伊東海軍大將題辭  
吉井海軍少佐序文  
上村海軍少佐序文  
中村海軍少佐序文  
小笠原海軍少佐序文  
巖谷小波君閣  
押川春浪君閣

海島冒險 海底軍艦

全世界を舞臺とせる奇々怪々の大冒険譚  
編の主人公は雄風凛々たる日本海軍士官  
を噛み殺す魚は印度洋に眠り獅子快男の  
拳飛ぶ紅顔の勇士あり變幻の輕艇に乗  
を駛り酒落の壯士あり奇異の鐵車を進  
軍艦たる孤島に不思議の響あり人外の  
軍艦旗翻る。奇絶！怪絶！又壯絶

洋裝全壹冊  
珍頗美本  
正價金三拾錢  
郵税六錢

慨世憂國 高山彦九郎

子秀麗の筆を以て其逸話を叙述せり如何に  
に我が皇運の陵夷衰頽を歎せし如何に海内諸  
州を歴遊して大義を唱道せし如何に後世萬葉  
に芳名を流して忠烈以て我青年立志ノ軌範たらし  
むるか本書を讀み玉は自から會得せらるべし  
且つ愛山子の文章は能く正之の如き偉人を傳す  
るに極めて好適爲に光彩萬丈の觀あり。

全壹冊袖珍頗美本正價金二十五錢郵税四錢



山路愛山君著  
山中古洞君書

版 藏 堂 武 文

著生先昂重賀志

義講學理地

版拾訂增

洋裝全壹冊 正價金三拾五錢郵税四錢  
本書は東西在來の地理學研究ノ方法に全く別機軸  
を出したるものなり、日本全國の私學校にて或は  
教科用、或は參考用、或は教師用に擧りて使  
するのみならず、清國福建省の福州府の學校  
にても同國人は専ら此書を使用せり。シャバン、メ  
ル記者批評して曰く、地理學を講究するには眞  
に適當なる著述なりと亦以て本書の眞價を知る

志賀重昂先生著

西洋木版畫數十個挿入

訂增 日本風景論

本書は審美的上學理的とを調和し、以て日本國の風景の洵美  
なる所因を親切に立論せしものにして、獨り日本人のみなら  
ず、外國人の批評に據るも日本近代期の稀有なる名著述とし  
て普く世に知られ、世に敷くこと既に四万部、版を改むること  
拾貳、一版毎に材料と圖畫とを新に補加せり、今や新涼水  
の如く燈火親むべき季節に當りて此書を繙閱せば殊に趣味の  
言ふべからざるものあらん

全壹冊 洋裝頗美本  
正價金五拾錢  
郵税拾錢





版 藏 堂 武 文

ENGLISH STORIES

SELECTED BY MISS UME TSUDA



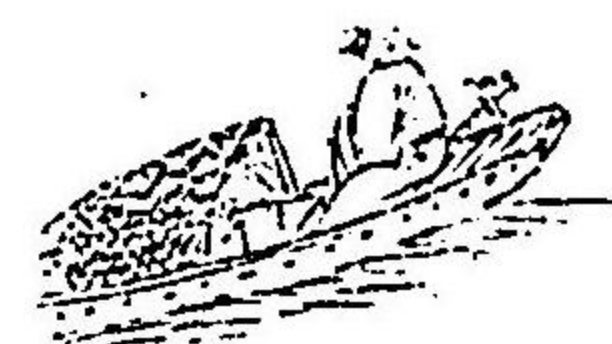
津田梅子女史編 (新刊)  
 イングリッシュ・ストーリーズ  
 美装全壹冊、定價金三拾五錢 郵税四錢  
 此書は津田梅子女史が多年教授上の實験に基  
 き實用英語の主旨により歐米大家の作に成  
 る小説數篇を撰び出で難句の字句には一々脚  
 註を加へたるものなり殊に印刷紙質は共に文  
 部省規定に準じて鮮明良好な程度とする學  
 等女學校の譯讀會話等の教科書となすに適し  
 一期間の譯讀會話等の教科書となすに適し  
 生をして歐米の俗語を知らしむるに甚だ便  
 り本書出版に先だちて既に採用を諾せられた  
 る學校から

著生先昂重賀志  
 書叢水山

澤 湖 及 河

錢拾四金價定  
 錢八稅便郵

是れ「河と人文」の關係を立論せるもの、第四版まで河と人生、日本史、朝鮮史、支那の三大河の文學、西洋史、米國史等十三章に叙説せし  
 も、更に河と破壊、濠洲史、湖と人生等の新篇十  
 一章を加へ、新に百多の  
 材料を補充し、舊版より  
 は紙數正しく二倍となれ



版 藏 堂 武 文



著君衛兵新上尾  
 說小事軍

戰 塵

本書は著者獨特の快筆を揮ひ、實験の活事を編作し、讀者をして無限の興趣を與へしむ由來國家の元氣は幼童少年の軍事思想如何に胚胎す、今此好著を得たる蓋し少年諸君唯一の珍友を得たるものと云ふべし、

目次○俳家成美傳○成美家集○はら／＼傘○成美連句集  
 ○四山藁○四山藁追加○隨齋諧話○附錄 葉兆句集 以上  
 天明復興の後、江戸俳壇の巨匠として、一方に雄を稱し、もの、之を成美道彦  
 葉兆等の諸家とす、就中成美は、學殖に富み、高韻遙かに一代に秀づ。  
 句は則ち清麗文は則ち瀟洒、吟すべく誦すべし。惜むらくは、其著世に乏しく、  
 容易に得る能はず。乃ちあまれく之を集めて、其全集を公にす。此書所載の成  
 美傳は、無角氏が其豊富なる藏書を渉獵して、傳引旁證、成美が性格及び其俳  
 諧を叙説してらすなし。苟も俳諧に志すの士にして、天明より天保に至る高  
 風俗調過渡の時代に於ける、かの文化前後の俳諧を知らんせば、須らく此書  
 を一讀せざるべからず。

俳家成美全集

全壹冊袖珍美本  
 紙數五百四十頁  
 正價金四十八錢  
 郵便税八錢

渡邊昇子 川口武定男 老鼠堂永機君 尾崎紅葉君  
 笹川臨風君 大野洒竹君 中内蝶二君 題字並序文  
 中村不折君 瀧和亭君畫 榮窓無角宗匠編著

全壹冊袖珍  
 金字入美本  
 正價金三拾錢  
 郵 稅 六 錢  
 小島沖舟君畫

(新刊)



# 文武堂新版書目

島田三郎君。田口卯吉君序文 金井啓一君著  
 世界一 大奇書 **權**

全壹册洋裝  
 金字入美本

郵正 便價 税金 卅五  
 稅金 六 錢

**謀學**

櫻井鷗村編

全壹册菊判  
 金字入美本

郵正 價 税金 未  
 稅 未 定

**少看護婦**

巖谷小波君校閱 木村小舟君作歌

田村虎藏君作曲  
 全壹册袖珍  
 洋裝美本

郵正 便價 税金 二五  
 稅金 二 錢

**家庭唱歌 桃太郎**

巖谷小波君校閱 木村小舟君作歌

田村虎藏君作曲  
 全壹册袖珍  
 洋裝美本

郵正 便價 税金 二五  
 稅金 二 錢

**家庭唱歌 舌切雀**

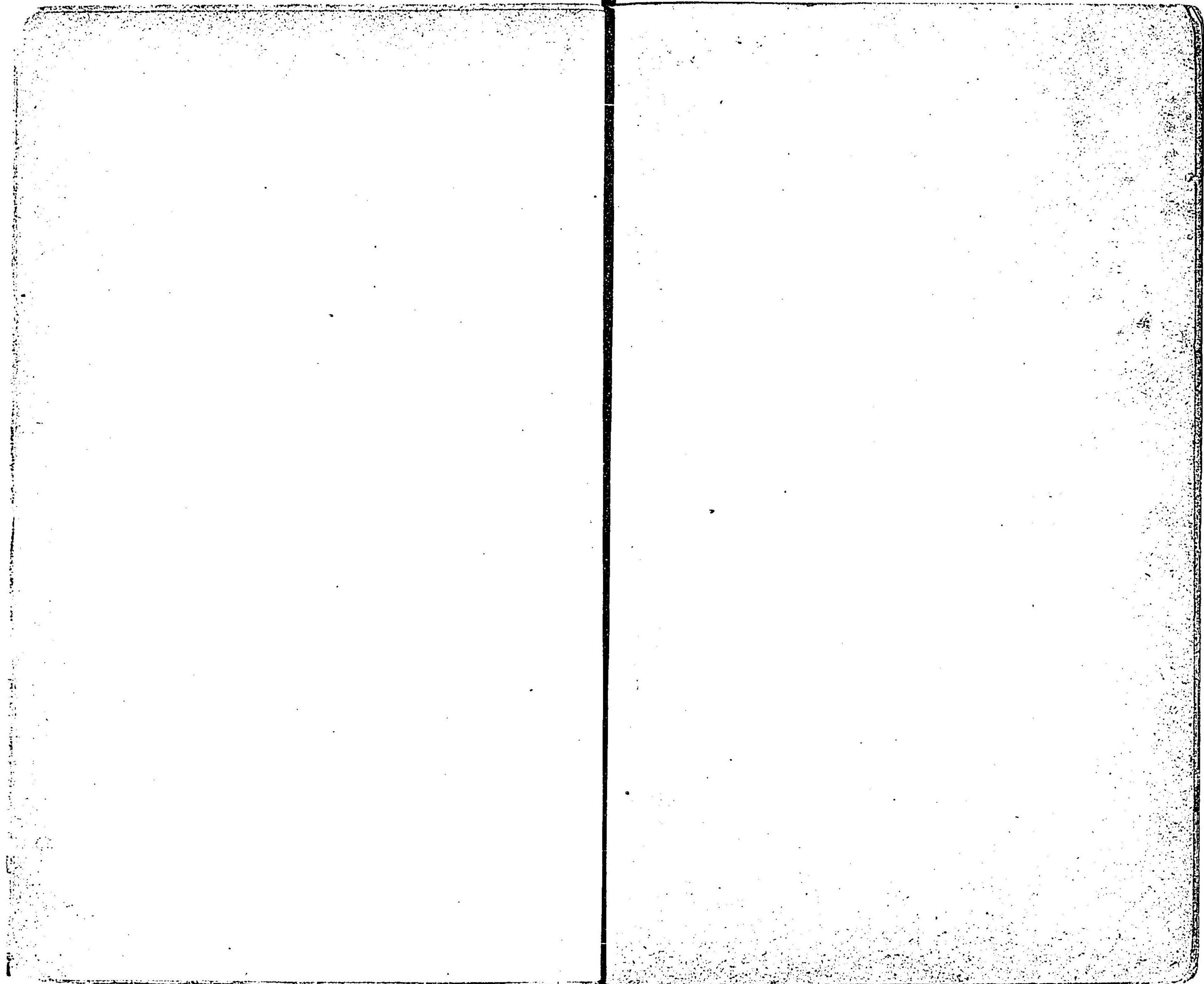
巖谷小波君校閱 木村小舟君作歌

田村虎藏君作曲  
 全壹册袖珍  
 洋裝美本

郵正 便價 税金 二五  
 稅金 二 錢

**家庭唱歌 松山鏡**

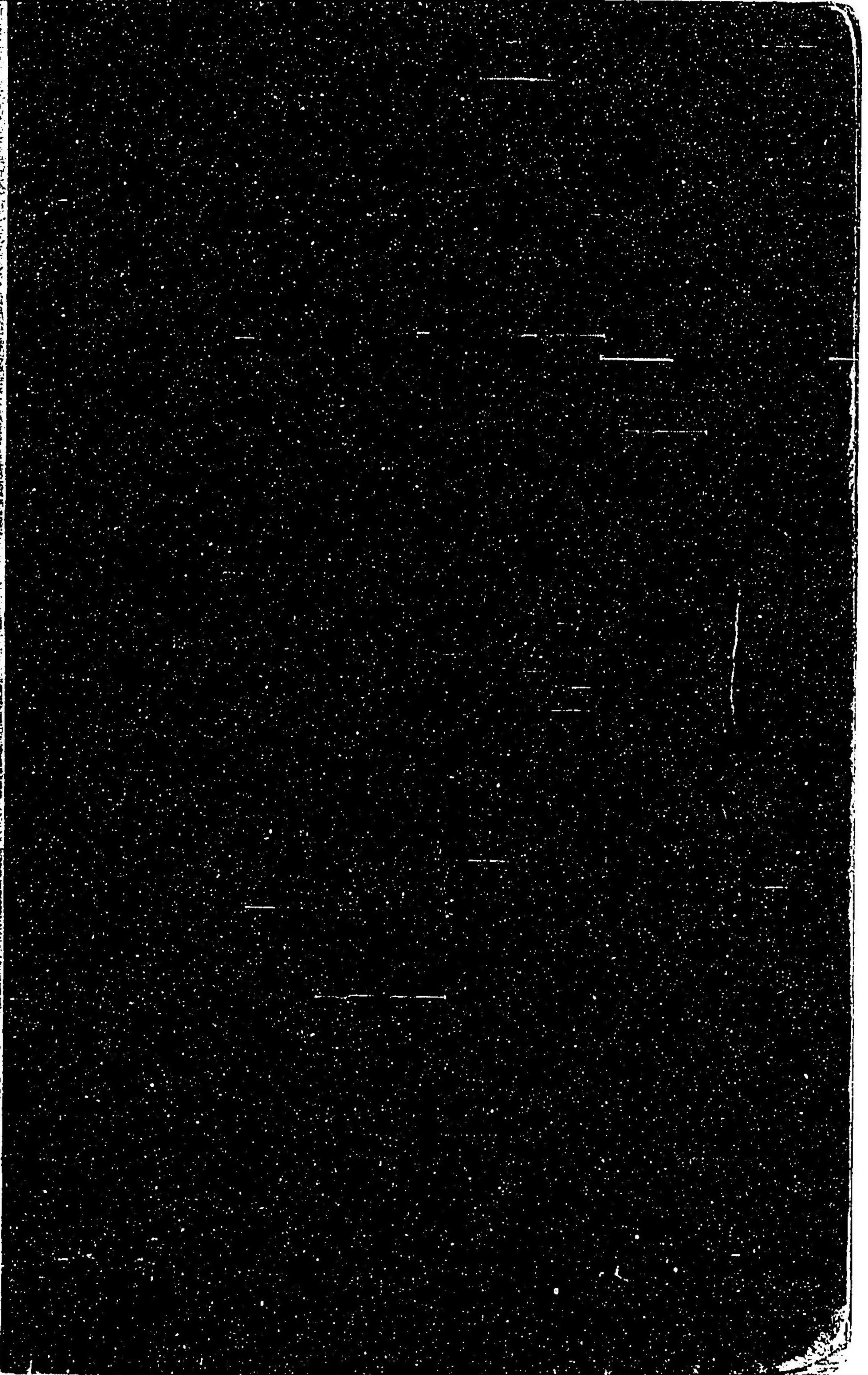
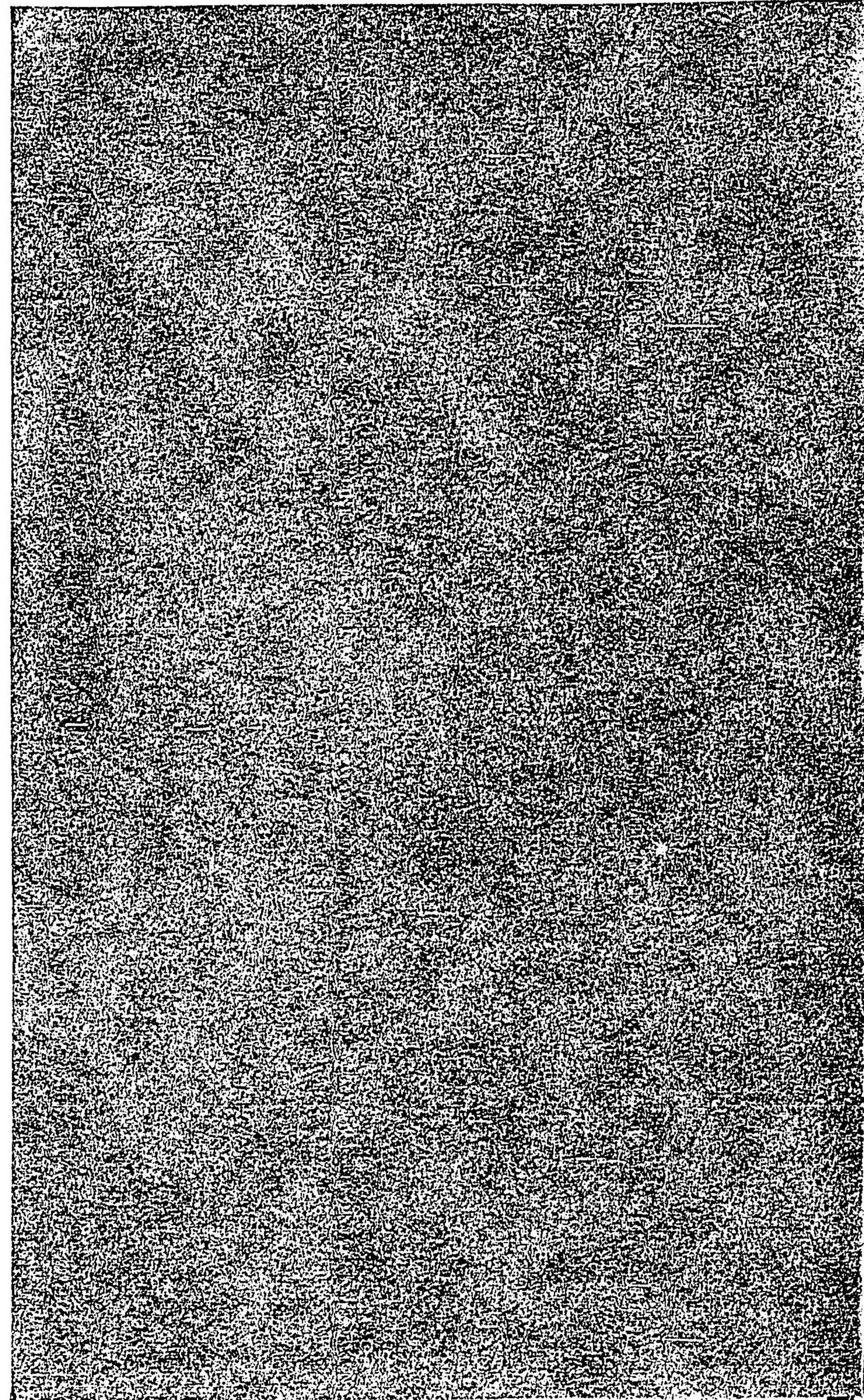






88
138

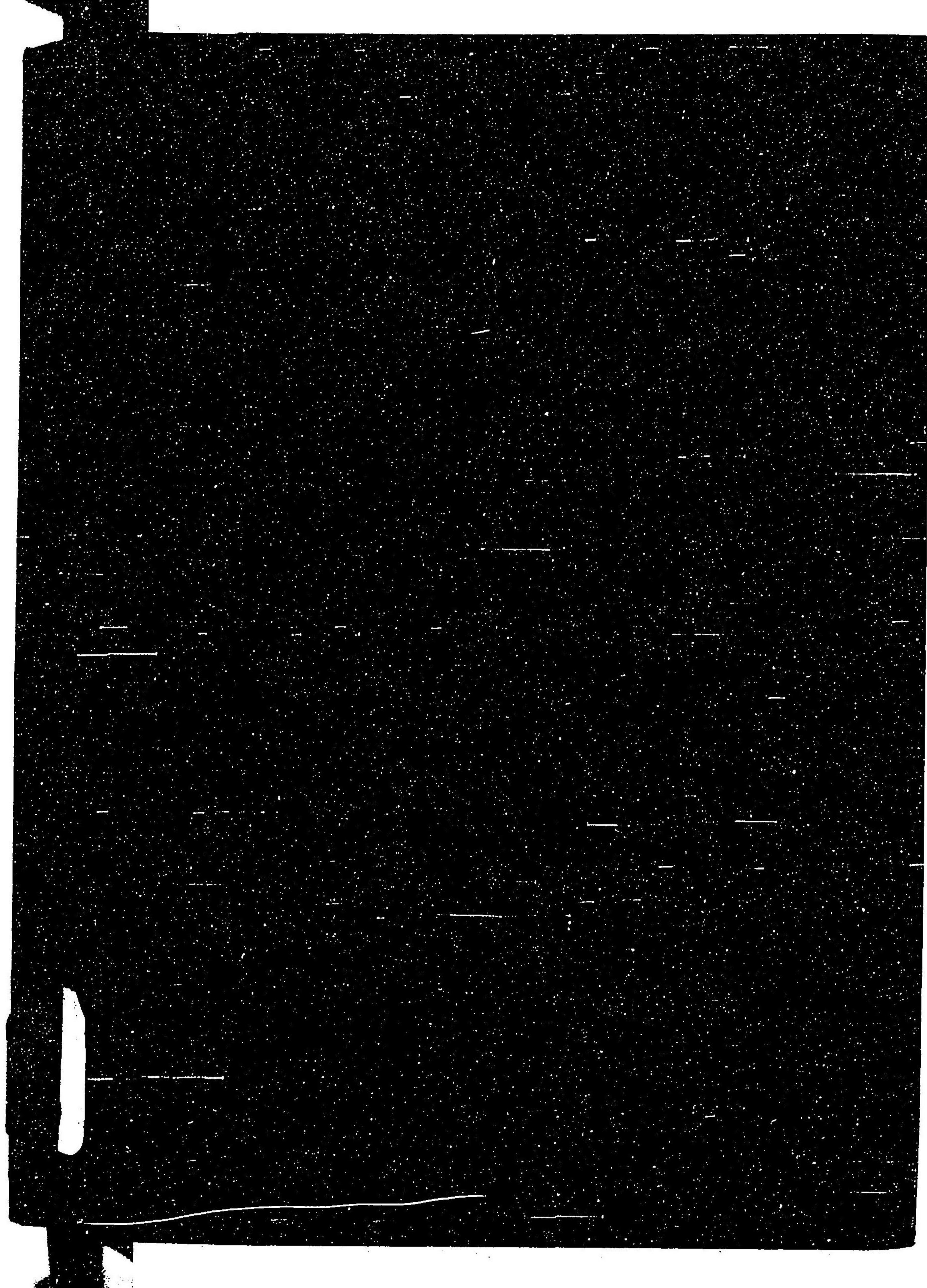




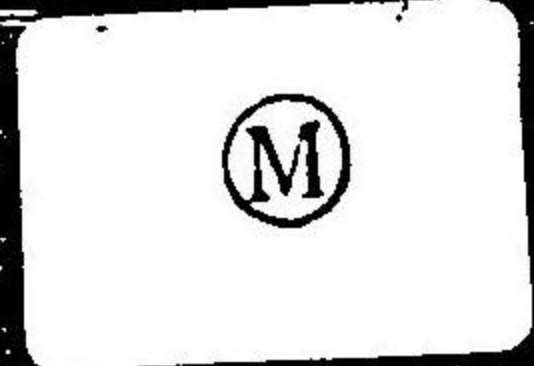


88  
138









002924-000-9

88-138

北清觀戰記

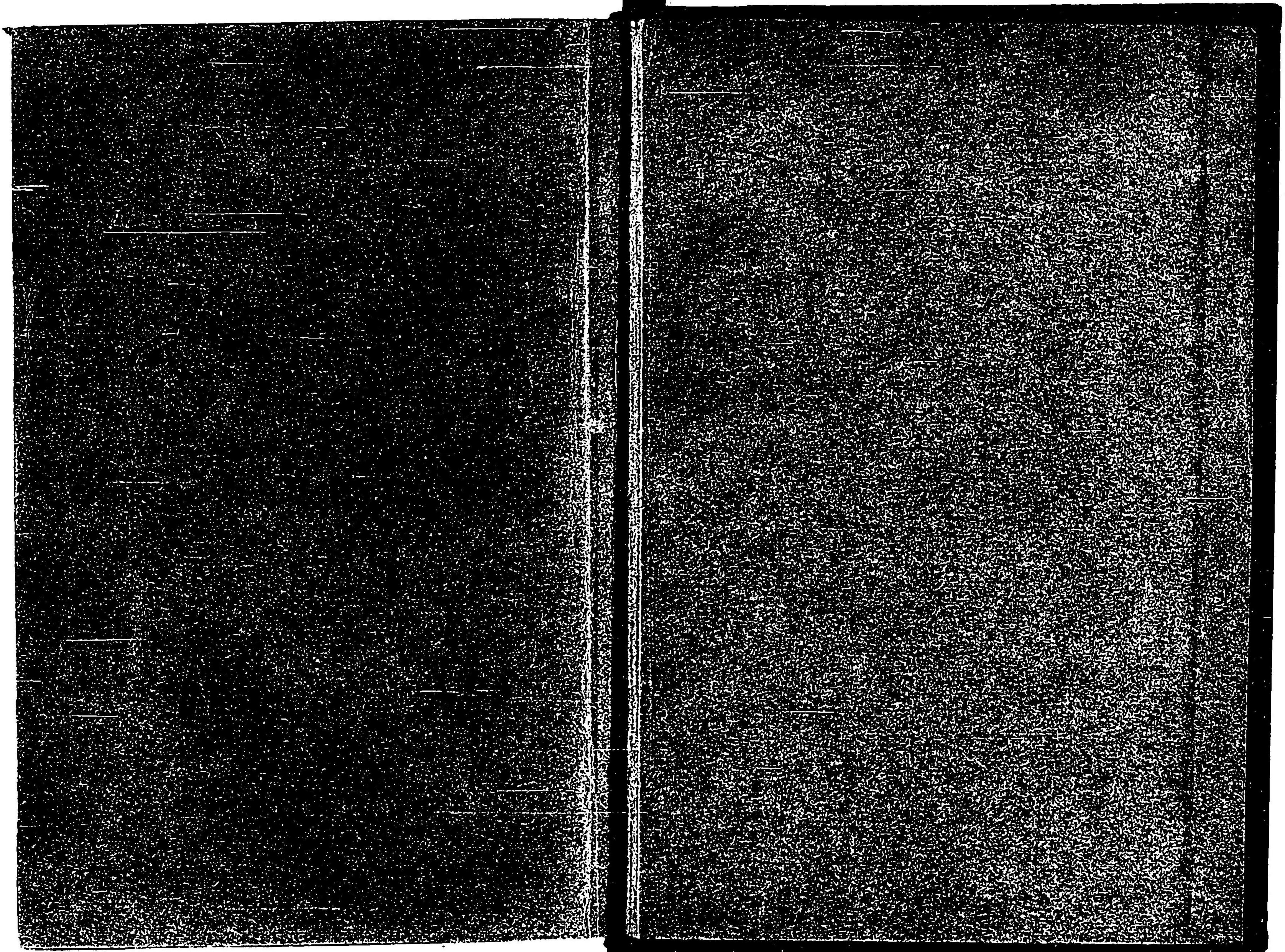
坪谷 善四郎/著

M34

ACB-6497









88  
138